令和６年度
「未来の教室」実証事業

最終報告書

【実証テーマ】

地域や民間の力を活用した多様な学びの実践を
支える持続可能な中間支援組織のモデルケース構築

【事業者名】

一般社団法人Dream Forest Supporters
（学校法人国際学園星槎グループ）

目次

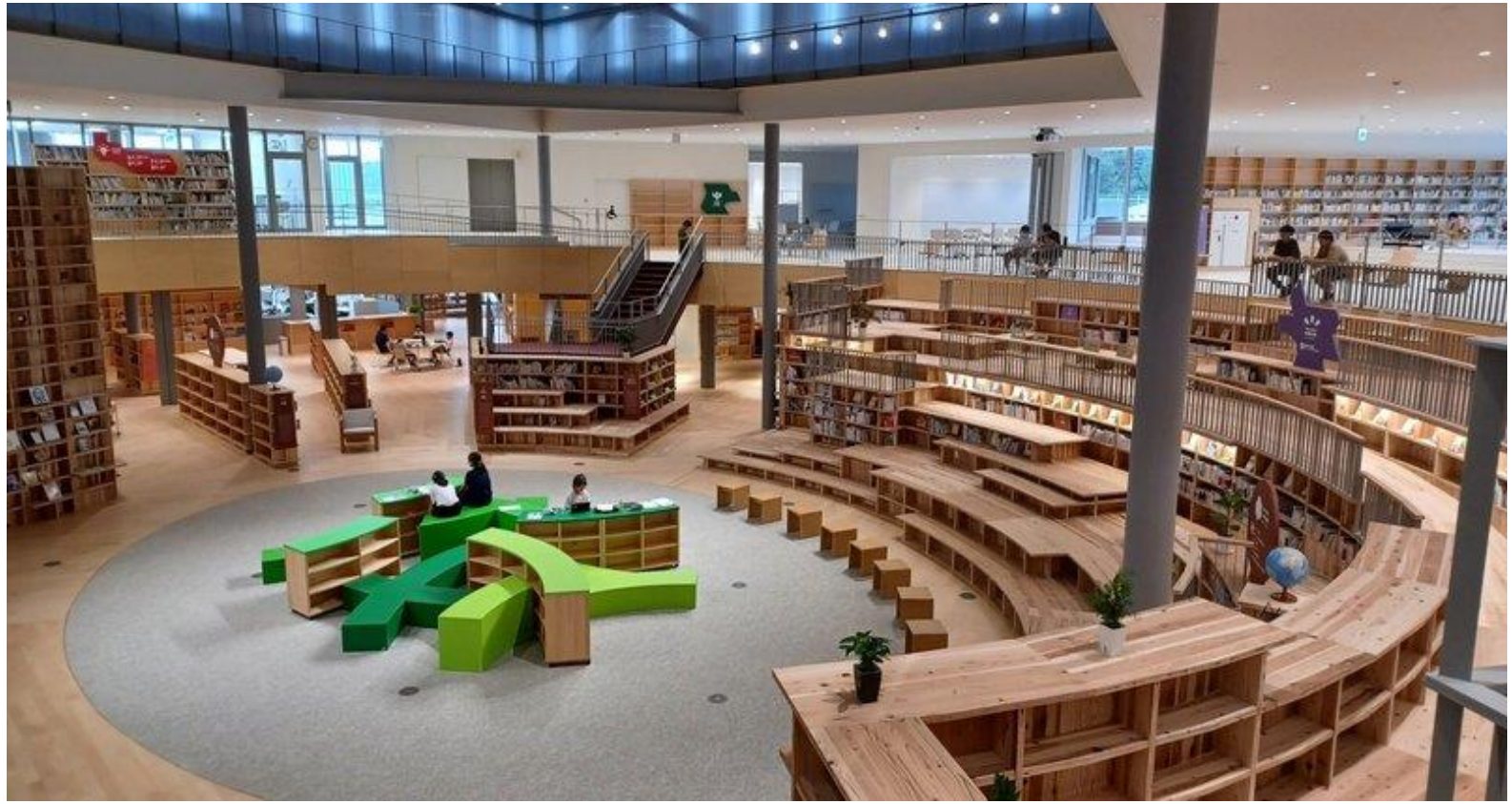
1．　事業者紹介

2．　実証サマリ

3．　実施内容

4．　実証成果

5．　今後の展望



義務教育学校 大熊町立 学び舎 ゆめの森

Appendix：

実施体制・実証フィールド 詳細

中間支援組織設立検討委員会 詳細

コーディネーター研修 詳細

学び舎ゆめの森
ホームページ

ゆめのおと
（最新のニュースなど）

1. 事業者紹介

一般社団法人 Dream Forest Supporters
統括責任者　安部 雅昭（代表理事）

学び舎ゆめの森校舎内にて、ゆめの森放課後児童クラブを運営
毎日、朝から放課後まで子どもたちや先生たちと接している

- ゆめの森の校舎内に児童クラブを設置しており、学校とのシームレスな関係の中で、誰一人排除しない、子どもを中心に置いたインクルーシブな活動を行っており、子どもたちに安心安全な環境を提供
- 空間が物理的に一体であることを活かし、放課後だけでなく、朝から放課後まで子どもの学校教育活動に携わっている
- ゆめの森の教育方針に沿って、児童クラブでも一人一人の興味関心や個性を伸長するための関わりやプログラムの提供を行っている

星槎グループについて

- 1972年創設。共生社会実現に資する「共感理解教育」の必要性を表現するため、身近なところから学ぶ、命のつながりを学ぶ、仲間と共に学ぶということを具現化してきており、「人を認める・人を排除しない・仲間を作る」という星槎の3つの約束のもと、さまざまな学び会いの場を創り、展開している
- Dream Forest Supportersは星槎グループに所属

【主な事業内容】

①教育事業　：幼稚園から大学まで、30以上の教育機関を運営
②福祉事業　：障害を持つ方や高齢者向けの支援施設を運営
③スポーツ事業：スポーツクラブの運営やスポーツ教育の提供

▼　大熊こども夏まつりの様子

児童クラブの子どもたちが、地域の皆さまに楽しんでいただけるよう準備を行った

1　（参考）実証フィールド

① 福島県双葉郡大熊町

② 大熊町立学び舎ゆめの森（義務教育学校）

- 所在地：福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平2019-1
- 町内唯一の義務教育学校
- 対象生徒：70名超
- “「わたし」を大事にし、あなたを大事にし、みんなで未来を紡ぎだす” がビジョン
- 2022年に義務教育学校としてスタート
- 0歳からのシームレスな学び、学びのマネジメント、演劇教育等の特色ある学びを柱に、習熟度に応じた学習や教科横断的なプロジェクト学習に取り組む
- 2021年3月の未来の教室通信で、ゆめの森が取組む一人ひとりのペースにあった自律的な学びを実現するためのAIドリル（Qubena）導入が好事例として紹介された

出典：学び舎 ゆめの森HP

③ ゆめの森放課後児童クラブ

（一般社団法人Dream Forest Supportersが運営）

- 所在地： 福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平2019-1
  （学び舎ゆめの森校舎内）
- 在籍者数：29 名

- ゆめの森の校舎内に児童クラブを設置しており、学校とのシームレスな関係の中で、誰一人排除しない、子どもを中心に置いたインクルーシブな活動を行っており、子どもたちに安心安全な環境を提供
- 空間が物理的に一体であることを活かし、放課後だけでなく、朝から放課後まで子どもの学校教育活動にも児童クラブの職員が一緒に参加する。一人一人の興味関心や個性を伸長するための関わりやプログラム提供を通じて、学び舎ゆめの森の教育方針と一体的に児童クラブを運営している

2. 実証サマリ

実証テーマ

地域や民間の力を活用した多様な学びの実践を支える持続可能な中間支援組織のモデルケース構築

実現したい姿

- ✓ 中間支援組織が地域・社会と学校などの学びの場をつなげて支えることで、子どもや大人は自らの学びを自由に選択できる「多様な学び」を実践している
- ✓ 全国で「民間の力を活用した多様な学び」を実践する地域が増え、それらの地域同士が連携することで学びの幅を広げている

実証スキーム図・実施内容

1 中間支援組織の設立に向けて、学校を支える民間組織の在り方などに関する主要な論点を検討委員会で多角的に協議

2 中間支援組織のコーディネーターに求めるマインドやスキルセット、および業務要件を整理
- ・コーディネート業務の試行による検証
- ・コーディネーター実務経験者による研修を通じて要件を整理

3 地域特性を踏まえながら子どもが探究心を抱くためのキッカケづくりとして地域企業の社長を活用した教育プログラムを検証
- ・教育に熱心な多様な社長と連携しプログラムを開催

実証成果

中間支援組織設立に向けた関係者合意が完了。設立に向けた事務手続きに着手済（令和7年4月に設立予定）
- ・中間支援組織の設立検討時の主な論点や考え方を整理

組織的コーディネーターモデル形成とその要件を特定
- ・チームでコーディネートを行う横展開可能なモデルを策定
- ・チームの中で共通要件と、各コーディネーターが担う役割に紐づく要件を特定

キッカケづくりの教育プログラムを継続する上での課題やポイントを整理
- ・教育に熱量ある方々と連携し、選ばれる学校となれれば、低コストで継続的なプログラムを実施することが可能な見込み

3. 実施内容

実証の出発点

Dream Forest Supportersは、ゆめの森の校舎内に設けられた放課後児童クラブを運営しており、子どもたちが日中と放課後をシームレスに過ごせる「場所」を提供している強みを持つが、放課後の時間以外に出来ていることが現状少ない

先生とは異なる立場でありながら、子どもたちをよく知るからこそ、放課後の時間だけでなく、**日中の学びに対しても、先生と共にもっと子どもたちのために活動することで、多様な学びの実践や先生の負担低減に貢献できないか**

先生方の人事異動が免れない中、建学の精神を持っている方がいなくなってしまった後も、ゆめの森の学びの在り方や心理的安全性のある環境的な魅力を発揮し続けることができるのだろうか?

ゆめの森の学びの価値を提供し続けるためには、学校や来年度から稼働予定のコミュニティ・スクールの取組みだけでなく、**地域側にも理念・建学の精神の根を張る仕組みが必要**ではないか

V

ゆめの森を支える地域学校協働本部の活動を補完する位置づけとして、中間支援組織を民間主導で実現できないか

地域学校協働本部

ゆめの森の理念、建学の精神、学びのあり方を支える

（1）コーディネート機能

（2）多様な活動（より多くの地域住民の参画）

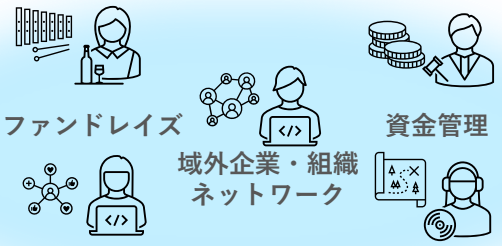
（3）継続的な活動

地域学校協働推進員

地域住民

町内団体、民間企業　他

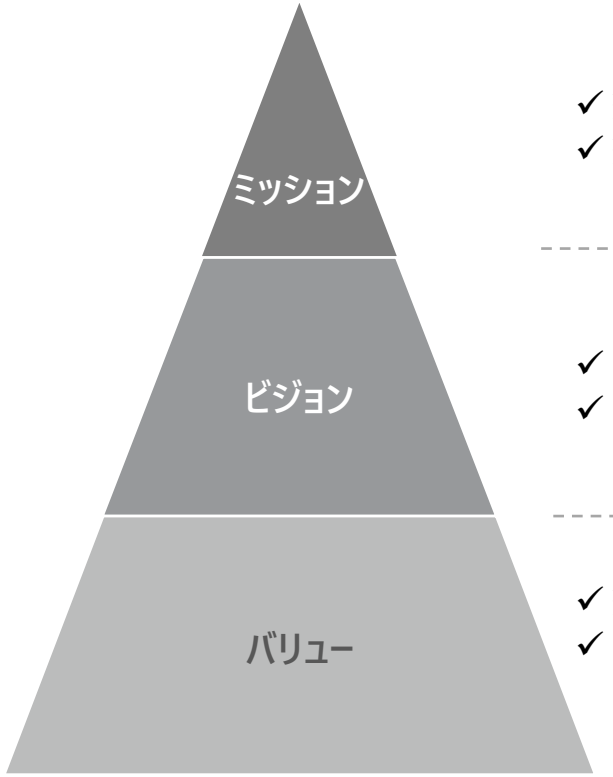
持続可能な仕組みとするための補完機能（仮説）



中間支援組織

3－①　実証の背景と目指す姿

ゆめの森の建学の精神の維持や、ゆめの森が地域と共にある学校となることを支えるために、「学びの場と社会や地域や企業などをつなげて、自由で多様な学びの実践を支える」、「教育やまちづくりを担う人材の育成に貢献する」を中間支援組織のミッションとして掲げる



✓ 組織が存在する意義や目的
✓ 組織が社会で実現したいこと

- **学びの場と社会や地域や企業などをつなげ、自由で多様な学びの実践を支える**
- **教育やまちづくりを担う人材の育成に貢献する**

✓ 目指す理想の姿
✓ ミッションが実現した際の状態

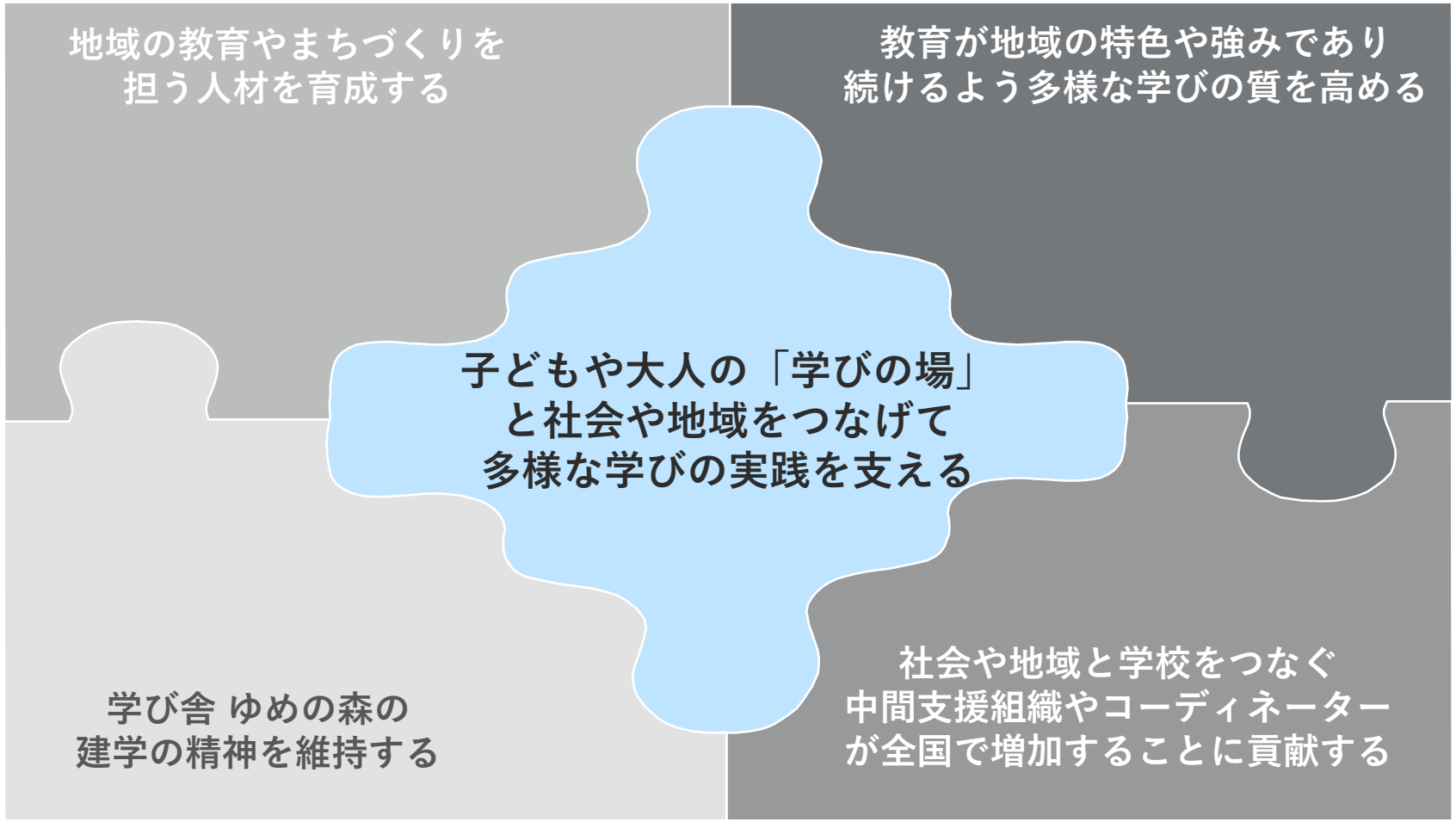
- **子どもたちが、各人の興味や関心のままに制約なく自由に学びたいことを学んでいる**
- **地域のみんなが笑顔になり、みんなで未来を紡ぎ出している**

✓ 組織の価値観や価値基準
✓ ミッションやビジョンの達成に向けた手段や行動指針

- **自分の価値観と相手の価値観を共に大切にする**
- **人は必ず成長する。主体性を発揮してもらうためのサポートを行う**

3－①　実証の背景と目指す姿

中間支援組織は、学びの場と社会や地域をつなげて、多様な学びの実践を支えながら、地域の教育やまちづくりの担い手育成、建学の精神の維持、多様な学びの継続的な質の向上、多様な学びの全国への横展開を目指す



3 －① 実証の背景と目指す姿

自治体・教育委員会

会計年度職員採用(学校勤務)
地域おこし協力隊の派遣
学校支援業務を業務委託
ふるさと納税を学校に還元

- ✓ 学校が求める予算や人材を調達
- ✓ 中間支援組織の立上げ・拡張時などは民間企業に業務委託をして学校や中間支援組織を支援

地域の支援機関・団体

商工会、地域金融機関
まちづくり関連団体
NPO団体、倫理法人会

- ✓ 定期的な活動実施時に少額でも継続的な金銭的な支援を実施
- ✓ 人手不足時や専門領域についてスポットで活動を支援

地域住民・個人

副業、アルバイト
インターン、ボランティア

- ✓ 中間支援組織の業務の一部を、民間と学校の両方に理解が深い副業人材などが担当
- ✓ アルバイトやボランティアでスポットで学校活動をサポート

学校

教員　子ども

中間支援組織

学校が地域や民間の力を活用し、多様な学びの実践を支える持続可能な組織

組織に関与する多様なコーディネーター

- 統括コーディネータ
- プロモーション担当
- ファンドレイズ担当
- ビジネス開発担当
- 地元企業担当
- 資金管理担当
- コーディネーター養成担当
- ・・・

組織の主な機能

1. コーディネート ： 子どもの学びに適した民間人材の発掘/関与を実現
2. ファンドレイズ ： 多様な学びを実践するために必要な資金を集める
3. プロモーション ： 学校の魅力を発信し、地域内外でファンを拡大
4. 教員の変革促進 ： 教員の意識変革や多様化、働き方改革等の後押し
5. リソース管理 ： 中間支援組織が関わる人、物、金、情報を管理
6. エコシステム ： 人、金、情報、価値などの好循環を創出

研究機関・企業

教育に関する共同研究
研修プログラムの共同開発
教材コンテンツの共同制作

- ✓ 学校が持つ魅力や価値に対価を支払い、多様な学びを横展開する研究や共同開発などを実施

地域の企業・団体

多様な学びの実践をサポート
（興味・関心に気付くキカッケを提供）
子どもが大人社会に入り活動する機会や場を提供
学校との共同事業を実施

- ✓ 学校や中間支援組織の活動を、ヒト・モノ・カネの観点で支援
- ✓ 学校と連携し、自社にとっても有益となる自社プロモーション、マーケティング、社員研修などの事業活動を展開

応援企業・団体

研修プログラムの委託/利用
地域/社会貢献活動で協業
企業版ふるさと納税で寄付

- ✓ 少額でも継続的に金銭面で支援
- ✓ 専門領域について助言を実施

３－②　実証目的と実施内容

実証内容	実証目的	実施内容
実証① **中間支援組織となる新法人の設立**	多様な学びの実践を支える**中間支援組織の在り方や設立プロセスについて検討**し、中間支援組織の設立に向けた合意形成を関係者と図るとともに、検討プロセスを整理し**他地域での中間支援組織の立上げ時のモデルケース**とする	中間支援組織の設立に向けて、学校を支える民間組織の在り方などに関する主要な論点を検討委員会で多角的に協議 ✓ 中間支援組織とコミュニティスクールや地域学校協働活動との棲み分け ✓ 地域の関係者の巻き込み方 ✓ 探究コーディネーターと中間支援組織のコーディネーターとの棲み分け ✓ 中間支援組織の機能や事業内容
実証② **コーディネーターに求める人材要件の検証・整理**	中間支援組織のコーディネーター人材に求めるマインドやスキルセット、および業務要件を整理する	学校と民間企業の文化・通念・ルールを一定理解し、民間企業とのコーディネーションの視点を有し、学び舎ゆめの森の活動に関与し、学校や教員との関係性を一定構築済の人物を試験的に登用し、コーディネーター業務や研修を実施 ✓ 中間支援組織の業務に従事するコーディネーターに求められるマインドおよびスキルセットと業務要件を整理 また、北海道浦幌町で長年に渡りコーディネーターとして活躍されている方を講師に迎え、コーディネート業務を行う上での心構えなどの研修を実施
実証③ **教育プログラムのトライアル実施、効果検証**	教職員に負担をかけず、企業が低コストで継続可能な方法で教育活動に関与する方法、地域特性を踏まえた子どもの探究心を刺激するプログラムの在り方を探る	チャレンジのまちという地域特性を踏まえつつ、学びたい・やりたいことにつながるリアルな社会教育の場として、「精力的に活動する社長」に協力いただき「子どもが探究心を抱くキッカケづくり」を目指す教育プログラムを実施し、効果を検証 ✓ 地域企業の協力のもと、地域特産物を活用して子ども達の思いを学びとして実現するための方法を検証 ✓ 熱量が高い社長が登壇するプログラムが、低コストで継続的な取組みで、子どもたちの探究心を刺激するために効果的であるかを検証

3 －③　実施経過

8月　9月　10月　11月　12月　1月　2月

★新法人設立に向けた合意形成が完了

実証1　中間支援組織の設立

9/24火　第1回 検討委員会
- ✓ビジョン、ミッションの考え方
- ✓組織の位置づけ
- ✓組織の機能
- ✓地域とのコミュニケーション

10/28月　第2回 検討委員会
- ✓前回の宿題対応（位置づけ、機能）
- ✓組織の在り方
- ✓自治体向け説明内容

11/26火　第3回 検討委員会
- ✓前回の宿題対応
- ✓ビジョン、ミッション
- ✓ガバナンス、ルール
- ✓実施事業(案)
- ✓収支/資金調達計画
- ✓来年度自治体予算

1/15水　第4回 検討委員会
- ✓前回の宿題対応
- ✓事業計画(ドラフト)
- ✓収支/資金調達計画

2/20木　第5回 検討委員会
- ✓前回の宿題対応
- ✓事業計画(案)
- ✓事業関係者との合意形成状況の確認
- ✓人材要件検証結果
- ✓新法人設立プロセス

事業計画や収支/資金調達計画の検討・作成

大熊町からの予算獲得に向けた交渉（教育委員会、教育総務課）

関係者アンケート実施/評価

関係者へ説明実施

新法人の設立準備や手続きを実施

関係者向け中間報告実施

新法人設立準備完了

実証2　コーディネーターに求める人材要件の検証・整理

花麹プリン開発・販売プロジェクト

10/11～12開催　コーディネーター研修企画・開催①

ゆめの森コーディネーターのマインド・スキルセットの整理

コーディネーター人材要件の検証結果分析

キッカケプログラムに関するプロモーションの企画/実施およびコーディネーター業務実施後の業務実施結果を評価

2/6開催　コーディネーター研修企画・開催②

中間支援組織のPR資料準備

中間支援組織に関するプロモーション企画/実施

実証3　教育プログラムのトライアル実施・効果検証

地域内の教育応援企業・団体情報の整理・可視化

キッカケプログラムの企画・調整・交渉・開催、およびプログラムに対する関係者の満足度を評価

2/21開催　キッカケプログラムのトライアルを行い継続可能性を評価

実証①　中間支援組織となる新法人の設立

３－④　実施内容　詳細　＜実証①中間支援組織となる新法人の設立＞

（１）中間支援組織設立に係る論点

中間支援組織の機能や事業内容など、当初検討が必要と想定していた論点に加え、コミュニティスクール等との棲み分けや、既存の探究コーディネーターとの棲み分けなど、新たな論点を設定し、検討委員会を通じて議論を深めた

【論点①】中間支援組織とコミュニティスクールや地域学校協働活動との棲み分け

■ **コミュニティスクール・地域学校協働活動との関係をどのように位置づけるか**

- 学校運営に地域の声を積極的に活かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくコミュニティスクールの取組みや、幅広い地域住民等の参画を得て地域全体で子供たちの学びや成長を支えることを目的とする地域学校協働活動と、地域や民間の力を活用した多様な学びの実践を支えることを目的とした中間支援組織の活動は、重なる部分が多いが、これらの関係をどのように整理すればよいか

【論点②】地域の関係者の巻き込み方

■ **中間支援組織の設立に向けて、関係者とどのような合意形成プロセスで進めて行くか**

- 関与してもらうべき有識者・地域の住民・企業・団体はいるか
- 検討委員会での議論の進捗や検討結果を、どのように関係者に伝え、コミュニケーションしていくべきか
- 中間支援組織の立ち上げに向けて、どのようなプロセスで合意形成をしていくべきか

【論点③】探究コーディネーターと中間支援組織のコーディネーターとの棲み分け

■ **探究授業のサポートをする探究コーディネーターとの関係をどのように位置づけるか**

- 実証フィールドであるゆめの森では、探究学習授業を担当する教員をサポートする探究コーディネーターが既に活動しており、中間支援組織のコーディネーターと業務内容等が重なる部分が多いため、どのように整理すればよいか

【論点④】中間支援組織の機能や事業内容

■ **多様な学びの実践を支える持続可能な組織として、どのような在り方や事業内容が適切であるか**

- 中間支援組織が有する機能は何か
- 持続可能な運営をしていくためにどのような事業内容にするべきか

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点①中間支援組織とコミュニティスクール、地域学校協働活動との棲み分け

コミュニティスクール・地域学校協働活動など、学校を取り巻く組織・制度の関係性について、検討委員会の中で説明・議論を重ねていく中で、委員間でのイメージの共有・すり合わせができ、中間支援組織の位置づけを明確にすることができた

検討委員会での主な意見

- ■ 中間支援組織を地域学校協働本部と同一とする場合、中間支援組織の活動の幅や柔軟性が損なわれることが懸念される。**中間支援組織には行政の単年度予算/計画に縛られず、民間企業ならではのスピードや実行力で支援してもらいたい**
- ■ コミュニティスクールの枠組みに加えて中間支援組織も存在すれば、どの地域にもない持続可能な仕組みを作れるのではないか。**中間支援組織は教育委員会をカウンターパートとし、CSや地域学校協働活動を支援していく**イメージ
- ■ 中間支援組織が地域と人を巻き込む潤滑油的な役割を担うためには、**学校教育と地域について理解が深く、教育に対して強い思いを持つ人がいることが重要**
- ■ **中間支援組織が、地域内の教育人材を継続的に育成する組織になっていけば、建学の精神の維持、多様な学びの継続や発展、持続可能で成長し続ける組織になっていける**のではないか
- ■ 中間支援組織には、**探究学習を教科学習につなげる部分もサポートして欲しい**。そのためには、コーディネーターが教員から信頼される環境の整備（例：職員会議への参加）や教員や子どもたちとの関係構築が重要になる
- ■ 中間支援組織には、ゆめの森の子どもや町民が、**用意された選択肢から学ぶのではなく、環境等の制約を受けずに自分が学びたいものを自由に学べる「真に多様な学び」の実践を支えて欲しい**

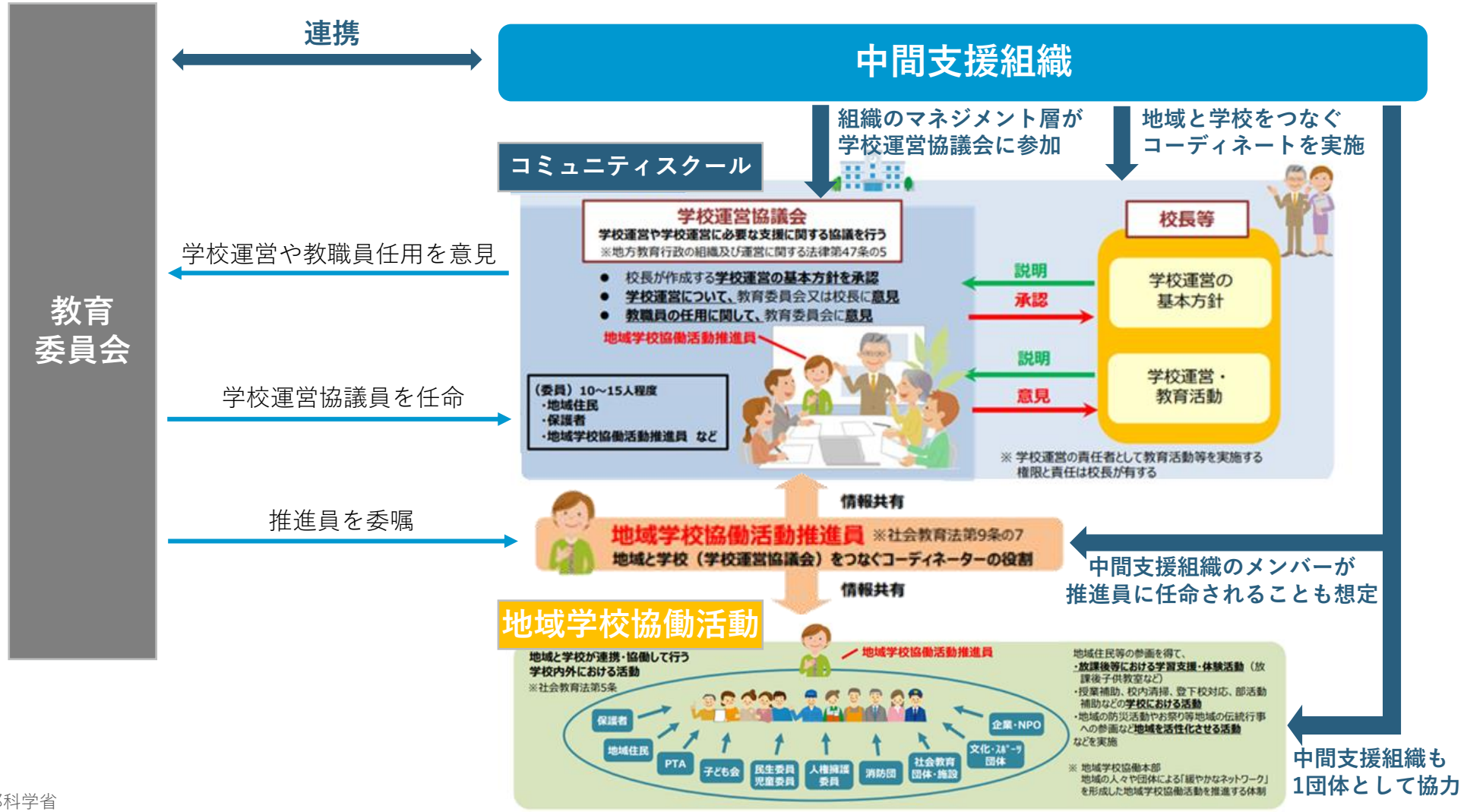
共通認識

- ■ 地域学校協働本部活動および学校運営協議会は法律の定めに応じて、個人が各役割を果たすもの。**地域と学校が協働し、充実した学びの環境を発展させるためには、点在的な個の力に依存せず、収益を上げながら、人材も確保し、地域と学校をつなぐ組織的な働きかけが必要**
- ■ ゆめの森の教育理念に根をはり、教育からまちづくりやひとづくりに貢献する組織として存在価値を発揮するためには、**中間支援組織は独立した存在**とし、教育委員会、コミュニティスクール、推進員等の**各組織・役割間の連携を促す潤滑油としての位置づけ**とする
- ■ 財政的制約を受けることなく**柔軟・迅速な活動が可能な組織とするために、各組織から独立した民間法人**とし、教育委員会をカウンターパートとする組織にしていくことで共通認識を図った

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点①中間支援組織とコミュニティスクール、地域学校協働活動との棲み分け

中間支援組織の位置づけ（1/2）

中間支援組織は、主たるカウンターパートを学校や学校協働活動推進委員ではなく、教育委員会とし、柔軟な意思決定や実行力を確保しながら学校と地域をつなぐ活動を行うこととする

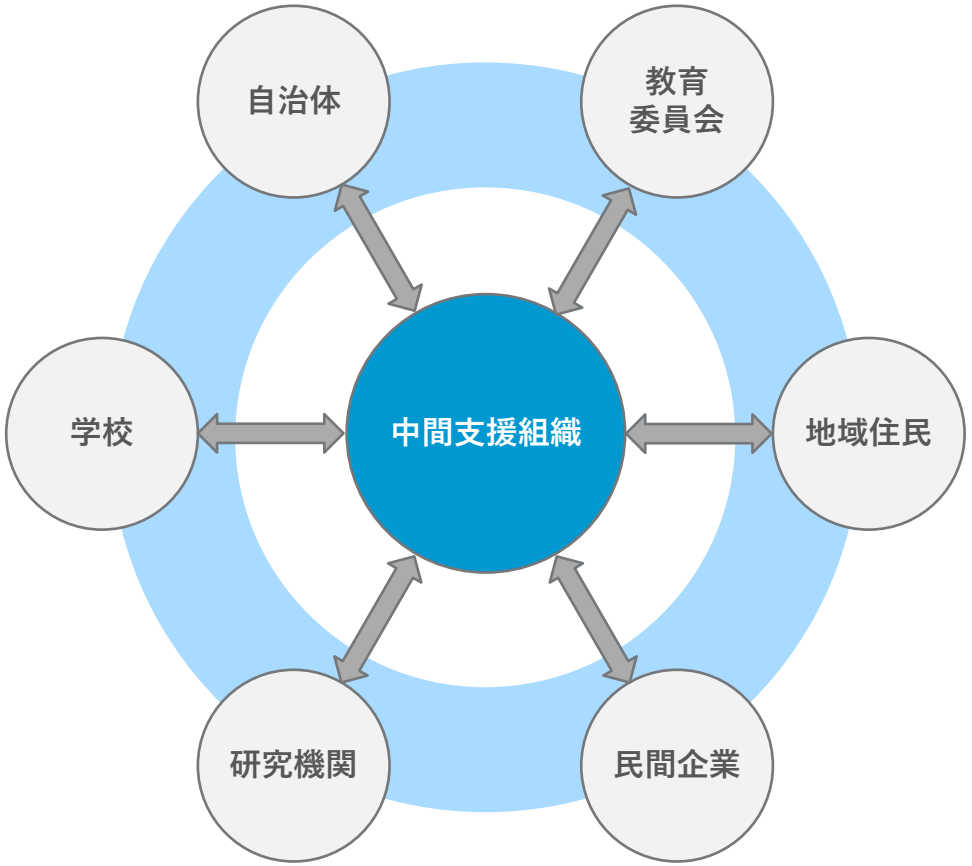


出所：文部科学省

（２）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点①中間支援組織とコミュニティスクール、地域学校協働活動との棲み分け

中間支援組織の位置づけ（２/２）

中間支援組織は、自治体や教育委員会からは独立した民間の法人として位置づけ、自ら活動資金を調達し、柔軟かつ迅速な取組みが可能な組織とすることとする



■ 中間支援組織は、自治体や教育委員会に属さない**独立した民間の法人**とする

- **事業内容や資金調達や支出などを自ら選択・決定できる**ため、柔軟・迅速な事業活動を行うことが可能
- 定期的な人事異動を避けることが出来るため、**組織内にナレッジやノウハウを蓄積しやすく**なる

■ 中間支援組織は、**地域学校協働活動の一員として活動**する

- 地域の民間企業・住民・保護者の考えを学校運営に反映させることに貢献していく
- 中間支援組織の活動方針、事業計画、事業実施内容に対する『ガバナンス』が重要となる

■ 中間支援組織は、**活動資金を民間や行政から調達**する

- 持続的な事業運営に必要な資金を調達する**ファンドレイズ機能**が重要となる
- サービス提供による収益、自治体等からの業務受託、補助金、ふるさと納税、寄附金、クラウドファンディングなどで調達する

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点②地域の関係者の巻き込み方

中間支援組織設立に向けて開催した検討委員会は、自治体や学校にとって連携し易く、学びの多様化に貢献し、実行可能なコーディネート業務を設計し、民間企業として持続可能な事業化を目指すとの観点から、①行政機関・学校、②有識者、③学校に関与する民間関係者、④ビジネス関係者を検討委員会のメンバーやオブザーバーに迎えて広く議論を行った

行政機関・学校

自治体や学校が連携し易く、学びの多様化に貢献する組織となるための提言をいただく

- ✓ 教育長
- ✓ 学校長、副校長、教頭、教員
- ✓ 自治体の教育担当課長（教育総務、生涯学習）

コーディネート有識者

コーディネート業務に対して多様な経験・知識を持つ有識者から、教育に貢献する業務設計/組織運営/人材育成等について提言いただく

- ✓ コーディネート業務経験者
- ✓ 学識者

ビジネス関係者

中間支援組織の取組を持続可能な民間事業にするため、経営面で提言をいただく

- ✓ 地元企業の経営者
- ✓ コンサルタント

学校に関与する民間関係者

既に学校に関わっている民間企業等の実体験を踏まえ、実現/実行可能な業務設計について提言いただく

- ✓ 探究学習支援事業の受託事業者
- ✓ 移住・定住支援センター
- ✓ まちづくり会社

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点③探究コーディネーターと中間支援組織コーディネーターの棲み分け

探究コーディネーター

実際に探究授業のサポート担当し、子どもたちと直接接する中で、授業進行の補助・探究カリキュラム開発などを行う。
（ゆめの森においては、探究コーディネーターが活動している。）

中間支援組織コーディネーター

立ち上げ時には、中間支援組織のコーディネーター業務は地域内外の様々なリソースコーディネートに注力し、探究授業を核に取組む「探究コーディネーターの援軍」として、子どもたちに届けることのできる多様な学びの選択肢を拡張することを目指す

学校（ゆめの森）と民間の接点をつくる

- ■ 多様な学びを実現する際に必要となる人材、資金、資材や材料、教育コンテンツなどをコーディネーターが中心となり地域から集める
  - 連携先：Oriai
- ■ 地域の方々に対して、学校や子どもたちとの関わりシロを示し勧誘することで、学校運営に協力・応援してくださる方を増やす
  - 連携先：共に創る会

地域の1人として挑戦を応援する

- ■ 地域で新たな特色や魅力等を創り出すような取組みをされている方に対して、地域を支える一員として協力していく
  - ➢ お祭りやイベントのお手伝いなど
    - 実行委員会
- ■ 共通/類似する興味・関心を持つ方々を中間支援組織がつなげていき、地域内で新たな挑戦や取組が生まれることを促す
  - ➢ 多様な学びのネタづくりにつなげる

地域の人々と多様な方をつなぐ

- ■まちのイベントや取組に中間支援組織も関与していくことで、中間支援組織がつながる方々も巻き込んでいく
  - ➢お祭りやイベントのお手伝いなど
- ■中間支援組織がつながる地域の方々の情報を活用し、地域の人々とつながりたい方をWin-Winとなる形でつなげる
  - ➢マッチングのサポートなど

地域の魅力を内外に発信する

- ■大熊町の教育の特徴や魅力を、各種チャネルを活用し地域内外に発信する
  - ➢ゆめの森の応援者や教育移住者の獲得などに貢献する
    - 連携先：まちづくり公社
- ■ゆめの森の運営に協力・応援してくださる方々のプロモーション活動を支援する
  - ➢子どもたちの活動報告などの際に、会社・組織等の宣伝も行う

各プレイヤーの動きを捉えながら、探究コーディネーターや先生方に多様な学びのきっかけや素材（リソース）を調達・提案し、実践をサポート

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点④中間支援組織の機能、事業内容・計画、人員計画

①事業活動を柔軟に行うことが可能か、②寄付をする際・受ける際の税制上のメリット、③法人としての信頼性、の3点から検討した結果、「一般社団法人」を選択した

法人形態について

検討の観点

✓非営利法人の6形態のうち、「NPO法人」、「認定NPO法人」、「一般社団法人」の3形態を比較対象とする
- ➢ 財団法人は、財産を長期にわたって維持・管理・活用していくことを目的としているため、検討対象外とする
- ➢ 公益法人は、認定を取得するまでに時間がかかり、また活動への制約事項も多いため、検討対象外とする

✓3つの法人形態について、以下の観点で比較を行う
① **事業活動の柔軟性**：学校以外の地域とのコーディネート事業、収益事業など、将来的に多様な活動を行う可能性がある
② **寄附時の税制優遇**：活動資金の核となる寄付を、個人や民間企業から受けやすい形態が望ましい
③ **法人としての信頼性**：地元の住民・企業・団体・行政などに事業に対する協力や寄付をいただけやすいことが望ましい

観点	NPO法人	認定NPO法人	一般社団法人（非営利型）
①事業活動の柔軟性	△ • 特定非営利活動費が50％以上（収益事業の足かせになり得る）	× • 特定非営利活動費が80％以上（収益事業の足かせになる見込み）	○ • 事業内容に制限なし
②寄付時の税制メリット	△ • 法人税の優遇あり（寄付金に対しては課税されない） • 寄付者への優遇措置なし	○ • 法人税の優遇あり（寄付金に対しては課税されない） • 寄付者への優遇措置**あり**	△ • 法人税の優遇あり（寄付金に対しては課税されない） • 寄付者への優遇措置なし
③法人としての信頼性	○ • 行政による審査を通過した団体のため、一定の信頼を得やすい	○ • NPO法人よりも厳格な審査を通過した団体のため、信頼を得やすい	○ • 法人格としての信頼性は落ちるが、検討会議に自治体や学校が参加しており、実質的には問題なし

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点④中間支援組織の機能、事業内容・計画、人員計画

ゆめの森での多様な学びの実践、先生の負担低減、建学の精神の維持などに貢献する中間支援組織となるために、中間支援組織は5つの機能を実装していくこととする

#1 民間活用機能（コーディネート）

- 学校や先生の経験・能力・人脈・時間・予算などが制約にならない、子どもが自分で自由に学びを選択できる環境の実現に向けて、**学校や先生と地域住民や企業等との橋渡し役を担い、民間の力を活用した『多様な学びの実践』を支援**する
- 外部との調整等を引き受け**先生の負担を低減**し、先生が子どもの学びに注力できるよう支援する

#2 現場改善機能（トランスフォーム）

- ゆめの森ならではの多様な学びの実践や、**教育現場の改善、学びのサードプレイスづくり、先生や子どもたちのWell-Being（学校が楽しい、学校に行くのが幸せなど）の向上に資する活動**を行う
- 先生や教育委員会に人事異動があっても、ゆめの森の建学の精神を守り続けられるよう、先生や子どもたちと共に教育現場に入り、**ゆめの森の教育の魅力や品質の維持・改善を支援**する

#3 広報機能（プロモーション）

- ゆめの森や大熊町の教育の魅力・強み・価値を地域内外に発信し、**より良い教育環境を求める子育て世帯の移住・定住促進**や、**教育に関心の高い企業・団体等との連携や協働を創出**する
- ゆめの森**視察者などに中間支援組織の理念や活動をアピール**し、学校や先生を支える中間支援組織の存在に共感・賛同する教育関係者を増やし、**全国で多様な学びの実践の輪を広げる**

#4 資金調達機能（ファンドレイズ）

- ゆめの森で多様な学びを柔軟かつ迅速に実践できるよう、**中間支援組織が裁量権を持ち使える活動資金を行政や民間から自ら調達**する
- 特定財源や一時的財源に依存せず持続可能な組織運営が出来るよう、**少額でも継続的な寄附の獲得**や**安定的な収益源となる事業**を行う

#5 資源管理機能（リソースマネジメント）

- 中間支援組織が持つ**ヒト・モノ・カネ・情報などの資源を、ゆめの森を支える活動に効率的かつ効果的に活用出来るよう管理**する
- 中間支援組織に属する**コーディネーター等が得た知識・経験・ノウハウ・ネットワークなどを、個人に依存しない組織知として整理・共有し、組織内で活用できる**ようにする

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論　論点④中間支援組織の機能、事業内容・計画、人員計画

中間支援組織では、学校と地域をつなぐコーディネーター事業などの非営利事業だけでなく、受益者に対価の支払いを求めて利益を得ることを目指す営利事業も実施していく計画

非営利事業

A）ゆめの森（学校）と地域をつなぐコーディネート事業
- 子ども・先生と地域・民間との連携を仲介し、多様な学びの実践を後押しする事業

B）ゆめの森の魅力発信事業
- ゆめの森のブランディングや生徒を増やすために、町民/町外/スポンサー向けのプロモーションを企画・実行する事業

C）サードプレイス創出・運営事業
- 町内での子どもや大人が学べる場づくりや環境の運営を自治体に代わり企画・実行する事業

D）多様な学びのキッカケ提供・伴走事業
- 子どもたちに、新たな自身の興味・関心を発見してもらい、多様な学びにつなげる支援をする事業

E）ファンドレイズ事業
- ゆめの森での学びの多様化や質向上を応援する資金を調達する事業

営利事業

①　民間（学校以外）と地域をつなぐ仲介事業
- ゆめの森とコラボレーションしたい企業・団体や大熊町で事業や研究を実施したいスタートアップや研究機関に対して、ゆめの森・町役場・町民・企業・団体などとのつながりを仲介し、手数料を得る事業
- ゆめの森の子どもたちの活動を事業化・資金調達の手段とできるようなビジネス開発事業

②　コーディネーター研修・認定事業
- 他地域でコーディネーター業務を行いたいと考える人材が、ゆめの森で実践されるコーディネート業務を実施可能となるように育成するための教材の開発や販売、研修プログラムの提供などを行う事業
- ゆめの森が求めるコーディネート業務を行える能力を備える人材であることを認定する事業

③　ゆめの森 視察事業
- 学校視察の企画やアテンドを有償で行う事業

④　教育現場の業務効率化支援事業
- 教員等の業務効率化・改善を支援する事業

実証②　コーディネーターに求める人材要件の検証・整理

3－④　実施内容　詳細　＜実証②コーディネーターに求める人材要件の検証・整理＞

中間支援組織のコーディネーターに期待される「役割」や「ふるまい」を、3つの取組みを通じて明らかにし、中間支援組織立ち上げ時の人材要件を整理した

他地域の先輩方による コーディネーター研修

北海道浦幌町でご活躍の先輩コーディネーター２名による２回の研修を開催コーディネーターとしてのふるまい方をご教示いただいた

価値を生み出すコーディネーターのマインドセットとスキルを特定

- コーディネーター自身が持っている特徴や強みを活かして、各ステークホルダーと信頼関係が築ける
- 関係者全方位を見る
- 正解ではなく、自身の指針を持って動く
- 「賞賛」と「ベストエフォート」の追求
- 様々なひとが偶然交わり、関わりたくなるようなきっかけや環境を仕掛ける

ゆめの森と地域人材との コーディネーション実践

先生方と地域の皆さまにご協力いただき、コーディネーションの実践機会をいただいた

コミュニケーションの根底にある「ゆめの森」の教育実践への共感と敬意があることを発見

- 地域企業やコーディネーター担当が各自で自身が力になれることを主体的に探して、前向きにに関与。必要な役割を円滑に分担して実行できた
- その根底には、ゆめの森が創造する機会や子どもたちの取り組みを実現したい先生方の思いへの共感と敬意が込められている

先生方の コーディネートニーズ調査

ゆめの森の６名の先生方にヒアリングコーディネーターとの協働に関するご感触と中間支援組織が先生方に役立てるヒントを伺った

外部（地域、全国、世界）とのリレーションとコミュニケーションのサポート役が求められていることを発見

- 先生が関わる前の相手方との関係性の耕しと意図の理解醸成
- 学校と地域や民間だけではなく、保護者と地域や先生と管理職といった関係性の間でのサポートも期待

他地域での実践者から、中間支援組織のコーディネーターに必要なマインドセット・スキルを導くためのインプットをいただいた

実証内容（1）他地域実践者を招いたコーディネーター研修

研修①中間支援組織は協働の拠点

不確実な結果であっても、失敗を許容する、チャレンジを目指せる仕組みや環境とすることが重要

＜協働に欠かせない要素＞

- すべての人が子どもを真ん中において考える
- サポートしてくれたパートナーに出来ないことで自分に出来ることを考え、今後はパートナーをサポート出来るよう努力する

＜コーディネーターのふるまい＞

- 計画的に地域の人と子どもを中心に巻き込む偶発性を仕込む。人を直線的に輪に入れる細かい導線は触らない。できることを見つけ、活躍する機会を仕掛ける。
- 様々な人が関わる上では、求められていることに適応しきれていない気持ち、孤独感に苛まれ、チャレンジに臆することがある。正解ではなく、指針を持って動く。
- ベストエフォートで構わないので、周囲がチャレンジを褒める、讃える機会が増えるように率先して実践する

研修②コーディネーターの実践的なマインドセット・スキル

＜コーディネーターのマインドセット＞

- 各ステークホルダーに信頼してもらえるように、相手に合わせて時間を使う
- 嫌われ役であっても学校と地域の関係に必要な役回りを率先して引き受け、あとで自身の信頼回復のために自分で動く
- コーディネーター自身が主体者であると勘違いしない
- 例年踏襲の風潮や社会通念にとらわれず、本質的に必要なこと＝子どもの学びに必要なことが何かを判断し行動する

＜コーディネーターのスキル＞

- コーディネーター自身が持っている特徴や強みを活かして、ステークホルダーとの信頼関係構築の仕方や関わり方を各自で追求する。
- 先生や地域との関係では、様々な捉え方があり、地域のために子どもを利用されていると思われることもある。関わる方々の当事者意識を醸成するための取組みを仕掛けていく。（浦幌の場合は、教育目標を地域の方や先生も交えたワークショップで決めた）

教育実践の機会を捉え、先生と地域民間企業とのコーディネーションを地域人材とともにボランタリーベースで検証。その結果、コーディネーターの役割を３つに分解しても、複数人で補完し合うことで地域人材によるコーディネートが機能することが明らかになった

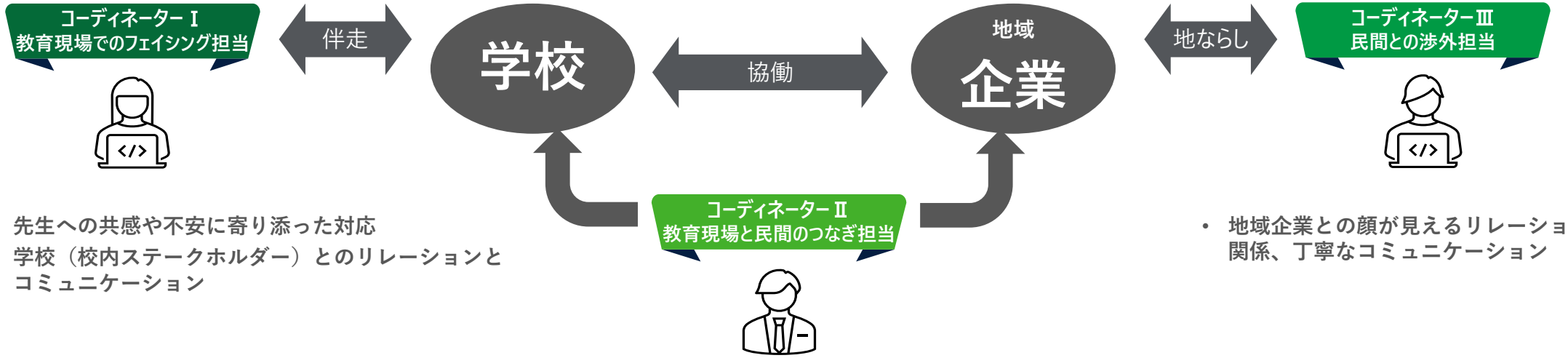
実証内容（２）組織的コーディネーションの検証

【実践の概要】

先生からのご相談の背景と課題

- 子どもたちが自分たちで必要な活動資金を調達をしたい。また、この一連の活動を教材として生産、販売前後日を社会の授業として進めたい
- 調達手法として商品開発と販売の準備を進めているが、原価資金の用意と利益の管理の流れが学校では対応しきれないところがある。そのため販売活動を地域の民間企業にサポートいただけるように進めているが、学校内で対応方針が混線してしまい、最も負担が少なく確実性が高い進め方は何か困っている

この問題解決に必要だったこと



- 先生への共感や不安に寄り添った対応
- 学校（校内ステークホルダー）とのリレーションとコミュニケーション

- 地域企業との顔が見えるリレーションと信頼関係、丁寧なコミュニケーション

- 学校側のニーズの把握とボトルネックの情報収集
- 事実と論点の整理
- 企業側が取り得る選択肢の情報整理
- 学校、企業両者の透明性のある情報共有と明確な役割分担の提示

中間支援組織がもつコーディネート機能には、子どもの学びの段階に応じた多様かつ的確なリソースの提案やコーディネーションだけではなく、さまざまなステークホルダー間のコミュニケーションと事象の全体感をとらまえた仕組みの検討をサポートすることが期待されている

実証内容（３）コーディネートニーズ調査　ー教員に対するヒアリングー

ヒアリングの概要

- ２月３日（月）、４日（火）２日間で、ゆめの森の先生方６名のお時間を頂戴し、中間支援組織が立ち上がった暁に、先生方のお役に立てるヒントをいただくべく、コーディネーターとの協働に関してヒアリングを実施

ヒアリング結果

現在コーディネーターに期待していること	■地域とのリレーションとコミュニケーションのサポート ➢とても助けてもらっている。特に地域人材とのネットワークや地域が持つ機会への理解が深く、子どもたちの興味関心に沿い、かつ教員の狙いを踏まえた提案をいただいている
コーディネーターがいてよかったこと	■ 教員だけでは知ることができなかった地域の人材や機会のご紹介 ■ 探究授業の実践と子どもたちの見取りを踏まえたカリキュラムの検討支援 ■ 子どもたちへのナナメの関係としての関わり
コーディネーターに今後期待すること	■ 全国、世界に目を向けたときの機会の提供やコミュニケーションのサポート ■ 教員が関わる前の相手方との関係性の耕しと意図の理解醸成
中間支援組織ができたら検討してもらいたいこと	■ 学校と地域や民間だけではなく保護者と地域や教員と管理職といった関係性の間のコミュニケーションのサポート ■ 教員の業務環境の改善検討のサポート

実証③　地域企業のリソースを活用した教育プログラムの
トライアル実施、効果検証

◆多様な学びの場の創造　子ども達の思いを「学び」として実現する

①教科学習（理科）と探究学習が出発点
“誕生した命を繋ぐ”“ウズラを育てたい” ⇒ 飼育費用をどう稼ぐ？
②動き出したキッカケ（学びの始まり）
6年(5名) 社会科 お弁当プロジェクト（包装用染物：草木染）
③飼育費用を稼ぐという発想に
地域特産品となるお弁当を作り、地元企業と連携して販売しよう
「酒粕＋いちごジャム」の商品化にトライし、「花麹プリン」を開発
④販売方法について検討
地元企業の協力を得て、地元イベントに出展し、花麹プリンを販売
子どもたちが社会に参加する「場」を創出・提供

課題 ⇒ 子どもたちの発展的な考えを実行するためには、お金を自由に出し入れできる仕組みが必要

解決策 ⇒ 子どもの学びを支えてくれる地元企業が協力

- ✓ 企業から一時投資 ⇒ 機材・材料費を提供
- ✓ 子どもたちが収支を計算
  - ①一時投資費用を企業に返金
  - ②返金後の利益は飼育用品として活用

子どもたちが学びの中で飼育費用を稼ぐことができた！

◆セルフエフィカシー尺度（販売活動の前後での変化をアンケートで測定）

男子2名　高い⇒普通、普通⇒低い　と下がった
女子3名　低い⇒普通（2名）向上
　　普通⇒普通（1名）変化なし

※自己認知力の違いが考えられる
※女子3名についてはチャレンジ精神は向上しており、実施の活動状況から
　チャレンジしたらできるということを感じたと考えられる

3－④　実施内容　詳細＜実証③地域企業のリソースを活用した教育プログラムのトライアル実施、効果検証＞

子どもたちに多様な仕事に興味を持ってもらうことを狙いとして、社長チップスエンタテイメント株式会社と連携して、教育に熱心な中小企業の社長にゆめの森に来ていただき、講演やレクリエーションを行うプログラムを開催。
ゆめの森の魅力的な教育の取組みは、地域内外企業の持つリソースを活用する際のキーポイントとなることを確認した

■ プログラム内容

- 社長チップスエンタテイメントと連携
- 2月下旬の放課後に開催（低学年の児童8人が参加）
  - ✓プログラム実施が教員の負担にならないこと、遊びの延長で社長に接してもらいたいこと、保護者会があるため保護者も参観できることを理由に、今回は放課後に開催した
  - ✓学校内での学びと放課後の活動をシームレスに繋げることで子どもたちの学びのフィールドを広げることを目指す
- プログラム内容
  - ①3名の社長による講演
  - ②かるたを使用したレクリエーション
  - ③交流会
- プログラム前後でアンケートを実施

■ 実証内容

- ➢ 子どもたちの探究心の刺激に効果的か？
- ➢ 多様な学びの実践に資するか？
- ➢ 継続的な取り組みになりそうか？

社長チップスエンタテイメント株式会社

企業のブランディングとプロモーションを、独自の方法でサポートしている企業

【事業内容】

✓ 社長チップスの製造・販売

社長チップス（各企業の社長のプロフィールやメッセージを記載したカードが同封されたポテトチップス）により、消費者に企業やその社長を紹介し企業の認知度向上とブランディングを図る

✓ イベント企画・運営

企業や社長をテーマにしたイベントの企画・運営

など

キッカケプログラム
社長カード・マスターズ

- 最初に気になる社長を１人選ぼう
- 社長をたおすためのヒントをきこう
- 社長からのミッションをGET
- 地域の人の力を借りてミッションをクリア
- 社長に報告して社長カードをGET
- 同じ社長でもカードはいろいろ
- 社長カードコレクションし、マスターをめざそう！

※画像引用：社長チップス

３－④　実施内容　詳細＜実証③地域企業のリソースを活用した教育プログラムのトライアル実施、効果検証＞

放課後の時間を使って、3名の社長（大熊町外）による講演と、かるたを使ったレクリエーションを実施。
人材育成や教育に高い関心を持つ社長たちは、「ゆめの森の教育が魅力的、面白そう」という理由で、大熊町を訪れ、
本プログラムに参加いただいた。

本の広場で社長の講演を実施（開始前の状況）

社長チップスのかるたを使った遊びを実施

4. 実証成果

4 －①　実証成果

実施内容	実証成果	実証成果に対する考察
実証① **中間支援組織となる新法人の設立**	中間支援組織設立に向けた関係者の合意形成が完了 設立に向けた事務手続きに着手（R7年4月設立予定） • 中間支援組織設立に向けた主要論点と議論の結果を取りまとめた • 設立検討委員会での議論した内容のうち、他地域での設立検討時に参考となるものを整理した	• 中間支援組織を設立するための一連の手続き・検討を経て、設立に当たり検討すべき論点を抽出することができた • 組織の形態・担うべき役割については、各地域・学校の特色を活かして作成する必要があり、地域内のプレーヤーをどれだけ巻き込んでいけるかも大きなポイントであった
実証② **コーディネーターに求める人材要件の検証・整理**	組織的コーディネーター業務モデルを策定 • 中間支援組織が地域や民間と学校をつなぎ多様な学びの実践を支援するには、経験値や専門性が高いコーディネーターが求められる • 一方で、それら能力を有する人材の採用・育成は極めて困難なため、チームでコーディネート業務を分担するモデルを策定 • 各コーディネーターが担う役割と、それに紐づく基本的要件を整理	• 民間資源を多様な学びに活かすためのコーディネータの機能は、幅が広く客観的に捉えにくい中で、複数の役割に分解して定義したことで、一人ひとりの専門性や得意領域を活かしやすく、学びの選択肢の広がりにつながった • コーディネーターに求めるマインドセットに、「混ざる、面白がる、余白を忘れない」、「挑戦を賞賛する」などを含めたことで、互いに連携し強みを活かしあうチームとして活動できる見込み • 本モデルは他地域でも取り組みやすい形と思料
実証③ **教育プログラムのトライアル実施、効果検証**	子どもの思いの実現や子どもの視野を広げるプログラムを教職員の負担が少なく継続実施するためのポイントや課題を整理 • 地域企業の協力や教育や人材育成に意識の強い経営者と繋がることで、子どもたちが学びの主役となれる場を設定できることを確認 • 教育に対して熱量が高い方に興味を持ってもらえる学校となることで、低コストで継続的にプログラムを実施可能であることを確認 • 柔軟性があり、誰もが参加しやすいプログラム設計や、子どもたちの探究心を刺激するための事前準備が重要。プログラムの内容については今後もトライアルを重ねて検証していく	• イベント的な教育活動ではなく、日常的な学びを意識し、子どもたちが主役となり学びを広げていく場を重ねて広げていくことが必要。単発プログラムであっても、他のプログラムとの体系的なつながりを意識して設計する必要がある • 低学年の「やる気」「できる」「できた」を膨らませていくことが多様な社会参加へと広がり社会を支えていくエネルギーになるではないか • 教育プログラムを持続的に運営していくにあたり、ゆめの森の魅力的な教育の取組みや環境が誘因になることを再確認した • 学校外部の方々との関わりにより、教科学習での学びをより深めることにも繋がるので、今後も連携を強化していく

実証成果①　中間支援組織となる新法人の設立

4 －②　実証成果　詳細　＜実証①中間支援組織となる新法人の設立＞

（1）中間支援組織設立に当たってのポイント

大熊町では教育委員会・学校のマネジメント層に教育現場の現状への課題感を有しており、ビジョナリーな視点を持っていたこと、設立段階から地域のキーパーソンを幅広く巻き込むことができたが、他の地域で実践する場合には、大熊町中間支援組織の事業を活用しながら、またまちづくりという観点から幅広いメンバーに関与いただくことが必要となってくる

中間支援組織設立に当たっての課題	ゆめの森の場合
①立ち上げのきっかけをどう生み出すか	■ 教育長、学校の管理職、放課後児童クラブ、コンサルタントの話し合いがキッカケ ■ 全員が教育現場の現状に課題を感じ、以下のようなビジョンを共有していた ✓ **ゆめの森を「稼げる学校」にしたい** ✓ ゆめの森は公立学校であり、先生方の人事異動が免れないが、**建学の精神の認識を強く持つ先生が学校を去った後も、ゆめの森の学びの在り方や心理的安全性のある環境的な魅力を発揮し続けることができる仕組みをつくりたい**
②巻き込むべきステイクホルダーは誰か	■ **教育委員会・学校・自治体のマネジメント層のキーパーソン**に加え、今後の**中間支援組織の運営に携わっていただきたい方々**を中心に幅広く検討委員会に参画いただいた
③実際の組織運営に誰がコミットするか	■ ゆめの森の魅力や特徴を理解し、**中間支援組織の活動に熱意を持ってコミットしてくれる方、町民・企業・団体などとの人脈や交友関係が広い方など**を立ち上げメンバーとして検討委員会に巻き込んでいくことで、コミットメントを確保

他地域で実践する場合のポイント

■ 立ち上げ・検討を進めていくには、**現在の教育の課題や今後の教育の在り方を語れる方による議論のリードが不可欠**

■ 教育現場の現状に課題意識のある方が中心になり、教育委員会・学校・自治体のマネジメント層を巻き込み、**マインドセットを変えていく**ことが必要
- ➢ その手段として、ゆめの森の視察や、中間支援組織で実施予定のコーディネーター研修事業を活用し、大熊町の教育関係者を巻き込み活用いただくことは一案

■ 立ち上げ段階から学校や行政のマネジメント層を巻き込むことで、地域や教育現場で必要とされる構想を検討していくことが可能となる

■ **魅力的な教育環境は、移住・定住や企業誘致の呼び水となり、まちづくり・産業振興のキーコンテンツとなる**。この観点を、地域内のキーパーソンに伝えることで、議論に多様な人材を巻き込んでいくことが可能となる

■ 立ち上げ時から多様なメンバーに関与してもらいつつ、コアメンバーの思いを共有しておくことで、組織運営におけるコミットメントに繋げることが可能となる

（2）中間支援組織設立検討委員会での議論のポイント

中間支援組織 設立検討委員会においては、多様なステークホルダーがそれぞれの立場から意見を述べ、それらをどうすり合わせていくか？ということがポイントだった

【事例１】中間支援組織の位置づけについての議論　ー地域学校協働活動との関係ー

委員からの意見

- この**中間支援組織の活動が、地域学校協働本部の活動そのものになっていくのではないか**。中間支援組織の中心人物が、地域と学校をコーディネートする中心となっていくのではないか（教育委員会管理職）
- 中間支援組織は、**地域学校協働本部の事務局的に位置づけるのがよい**のではないか（学校管理職）
- 中間支援組織が事務局的役割を担い、**地域学校協働活動推進員イコール中間支援組織とイメージ**している。地域学校協働本部の他のメンバーには調整能力がないと思うが、行政が調整してしまうと、地域の意見の反映がされないという懸念がある。**民間が主体的に資金調達も自ら行いながら、地域全体で学校を支えていく仕組みを作ることができたらよい**のではないか（自治体管理職）
- 中間支援組織のメインはコーディネート機能。地域学校協働本部を魅力的な組織にできるように耕していく存在と思料。**地域学校協働本部の補完より強化というイメージ**（学校管理職）
- 中間支援組織は**地域学校協働本部を統括する存在**とするのが理想。（地域企業役員）
- 中間支援組織は地域学校協働本部の機能を持つ存在として位置づけ、**中間支援組織が地域学校協働本部の役割を飲み込むという形がよい**のではないか（学校管理職）

すりあわせのポイント

中間支援組織の立ち上げ趣旨とカウンターパートの設定

当中間支援組織は、ゆめの森の建学の精神に則った**柔軟で実行性のある意思決定をし続ける存在**になりたかったため、**特定の関係者と主従関係を作らないことが重要であった。**また、多様な学びの実践を支える**実行力を高めるには、意思決定者である教育委員会や学校管理職層をカウンタパートとすること**が求められた。

既存の枠組みを兼ねる制約

地域学校協働活動推進員は**教育委員会に委嘱される存在**であり、その**権限は法的に位置づけられていない**（社会教育法）ため、**活動範囲や影響力に制約が生じ得る**

取り組みの持続性

地域学校協働本部活動推進員は**個人に委嘱**するもの。復興途上の大熊町においては、点在的な個の力に依存せず、収益を上げながら、人材も確保する**組織的な働きかけの方が持続的**

結論

当中間支援組織は地域学校協働本部や学校運営協議会には内包されない**独立した存在**とし、教育委員会、コミュニティスクール、推進員等の**各組織・役割間の連携を促す潤滑油の位置づけ**とした

（２）中間支援組織設立検討委員会での議論のポイント

【事例２】中間支援組織のコーディネーターの機能についての議論　ーすでに活動する探究コーディネーターとの関係ー

委員からの意見

- 既存の探究コーディネーターの取り組みを中間支援組織が担うとすると、**学校側が考える運営方針の検討についても補完したり、教員の授業やマインドセットも補完したりできるのではないか。企業側とうまく擦り合わせる機能を民間である中間支援組織に担ってもらえるとよい**（教育委員会管理職）
- 中間支援組織が掲げる**民間活用機能は既存の探究コーディネーターにお願いしていて、**個別の授業の伴走／授業全体をデザイン・年間の授業計画をたてていく／カリキュラム全体を開発していく、といった異なるレイヤーの議論があるところ。**カリキュラム開発などは中間支援組織だけでは担えない**。学校側との協働が必要。また一朝一夕にできるものではなく、徐々にお互いの理解が深まっていくことが必要。**コーディネーターは学校の下請けとなっているケースが多いが、経営のパートナーレベルまで目指していければよい。**中間支援組織のコーディネーターは、**探究学習コーディネーターを下支えする存在**（学校管理職）
- **教員やコーディネーターのキャパシティやリソースが子どもの学びの制限にならないように**したい。ゆめの森だけでは難しい部分もあるが、同様の組織が全国各地にできれば100％対応可能になると考えている。リソースと財源を広げ、**探究コーディネーター委託事業予算が学びの上限にならないよう、中間支援組織が関与することで様々な制約を取り払いたい**。（コンサルタント）

すりあわせのポイント

コーディネーターに対する解像度

中間支援組織が取り組む予定のコーディネート事業について、委員間で「コーディネーター」への理解や解像度に差があり、議論が深まらない

- ✓ **ゆめの森で活動する現役探究コーディネーターから現在の役割や取組み内容を紹介**
- ✓ 先行的な取り組みの多い**”高校魅力化コーディネーター”**の思想や、近隣のふたば未来学園でのコーディネーターの役割・事例について**検討委員会にて委員より情報提供**
- ✓ **他地域**で十年以上にわたり地域存続の危機を起点にこどもを真ん中にした教育やまちづくりを進めてきた**ベテランコーディネーターによる研修を開催**

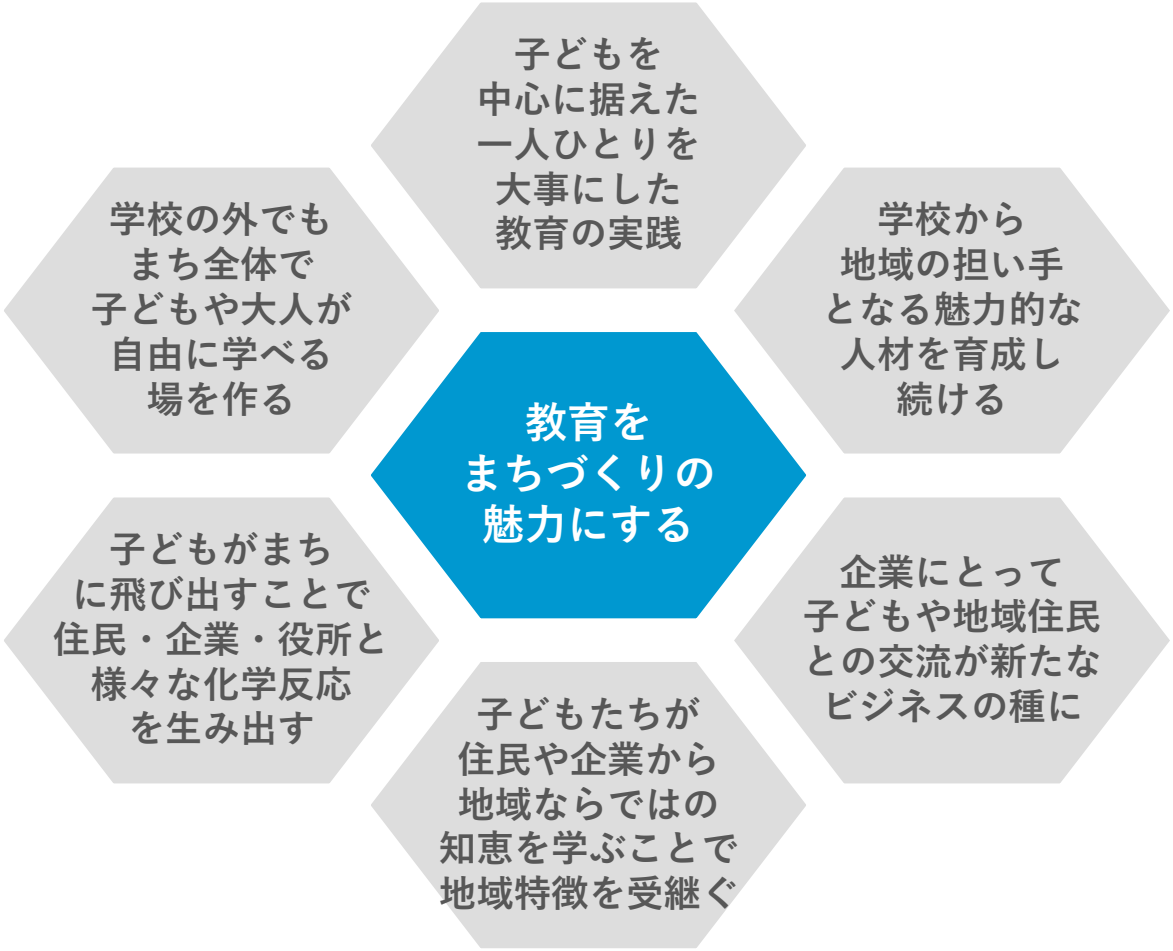
結論

当中間支援組織**立ち上げ時には**、中間支援組織のコーディネーター業務は**地域内外の様々なリソースコーディネートに注力**し、探究コーディネーターの「援軍」として、子どもたちに届けることのできる多様な学びの選択肢を拡張する。

将来的には、地域内外の多様なリソースとつなぐコーディネーター業務と、**探究学習やカリキュラム設計を支援する**探究コーディネーターの**双方に取り組む**ことを明確化した

（２）中間支援組織設立検討委員会での議論のポイント

中間支援組織の活動を通じて実現したいことに「教育をまちづくりの魅力にする」、「教育が町の復興に貢献する」を掲げて上で、具体的な中身を検討していったことにより、教育委員会・学校・自治体・地元企業と同じ方向を目指したポジティブな議論をすることが出来た



実証成果②　コーディネーターに求める人材要件の検証・整理

実際に各地域で人材を登用し、コーディネーターを多様な学びを支える環境として実装していくためには、地域特性に応じた①人材要件、②人材登用障壁を下げる方策の2点を整理することが必要

大熊町学び舎ゆめの森のケース

成果

①実働的な人材要件の明確化

全コーディネーターに共通する土台となる**基礎マインドセット**の上に、**各ロールと必要なスキル**があり、これに応じて**人材要件を定める「型」を整理**

- **基礎マインドセット**
- **ロール別スキル**

②人材登用障壁の低減策

ボランタリーベースでも関与できる工夫と仕組みにより、令和７年度より復興支援員１名の稼働を確保

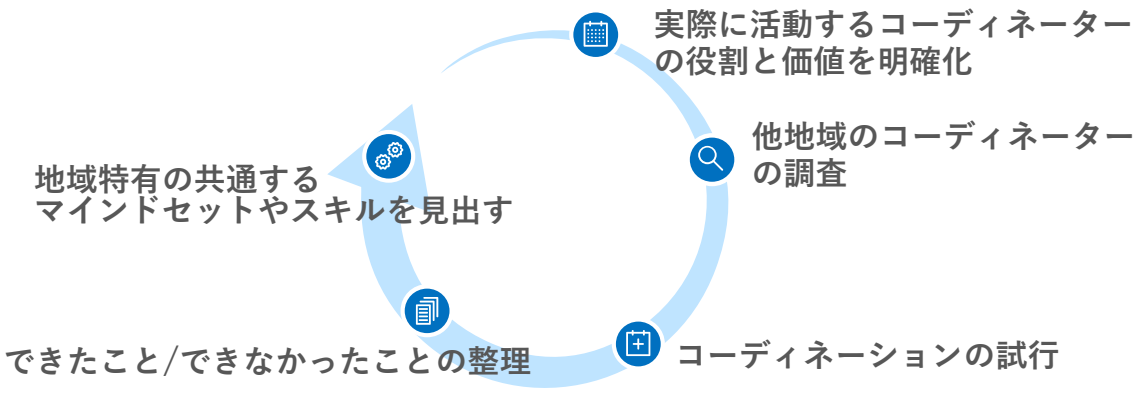
＜工夫＞

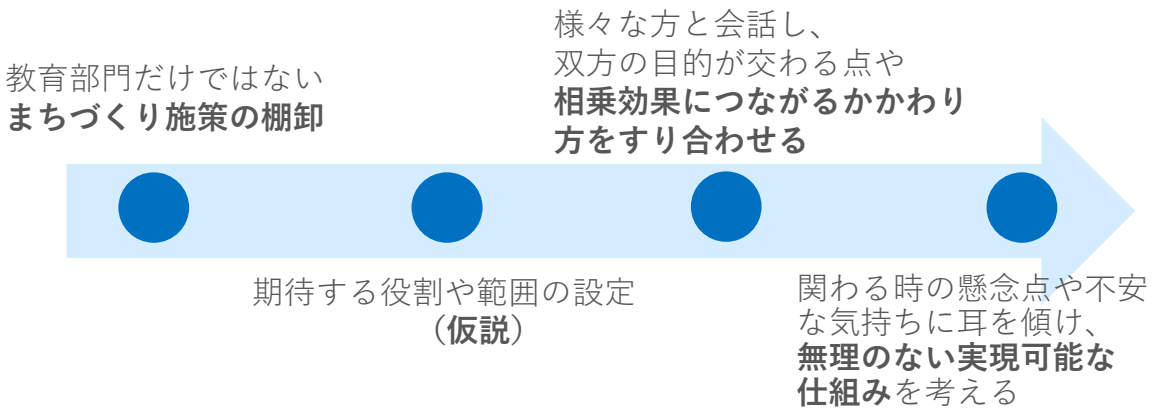
- **産業振興、福祉などまちづくり施策と絡め、地域の資源・人材を活用する**
- **期待するロールを明確に整理し、関わるハードルを下げる**

＜仕組み＞

- **組織的コーディネーターモデルを形成**
- **スリムな組織体制を前提とした事業戦略**
- **雇用に係る費用面の措置は、公的制度を可能な限り活用**

導いたプロセス





コーディネーションにより価値を発揮するためには、専門的かつ幅広いスキルが必要になるが、それらを具備する人材の確保は困難である。そのため、大熊町ではコーディネーターの役割をステークホルダーとの距離感に応じて３つに分解し、チームで１つのコーディネートを完遂するモデルを形成

大熊町における組織的コーディネーターモデルと人的要件

学校 ↔ 伴走 ↔ **コーディネーターⅠ**（教育現場でのフェイシング担当） ↔ 共有・協働 ↔ **コーディネーターⅡ**（教育現場と民間のつなぎ担当） ↔ 相談・連携 ↔ **コーディネーターⅢ**（民間との渉外担当） ↔ 交渉 ↔ 地域や民間

コーディネーターⅠ

- 先生・子どもとの接点を可能な限り多く持ち、現場での困り事や解決すべき課題、子どもの想い等を把握して、中間支援組織内に共有することが出来る人材
- また、子どもや教育現場にとって実現可能かつ良い結果が期待できる取組であるか、先生と同じ目線で考え、共感して進めることが出来る人材
- 仕事などで、普段から学校や先生との関わりが多い方が候補

コーディネーターⅡ

- 教育論や学校のルールやロジック、先進的な教育の取組事例などに詳しく、現場で生じている課題に対し解決方法を提案することが出来る人材
- また、町の教育理念や教育政策、各学校の教育方針に深い理解があり、先生に対して民間知見を活かしながらオリジナリティのあるアプローチを提案することが出来る人材
- 学校教育に知見があり、民間でひとづくりの仕事をする方などが候補

コーディネーターⅢ

- 地域内外において、特定の領域で様々なネットワークを有しており、子どもと先生にとって有益となる方を責任感をもって探索・紹介することが出来る人材
- また、町の教育の魅力や特徴を、交渉相手の興味・関心を踏まえ自分の言葉で熱量を持って語れ、相手の心を動かし、賛同者を生み出すことが出来る人材
- 町民・企業・団体などとの人脈・交友関係が広い方などが候補

基礎マインドセット

ゆめの森の理念と発揮する教育的価値や影響力への理解と共感	混ざる、面白がる、余白を忘れない	関わるすべての人の「困った」を見逃さない視野をもつ	挑戦に対する「賞賛」と「ベストエフォート」の追求

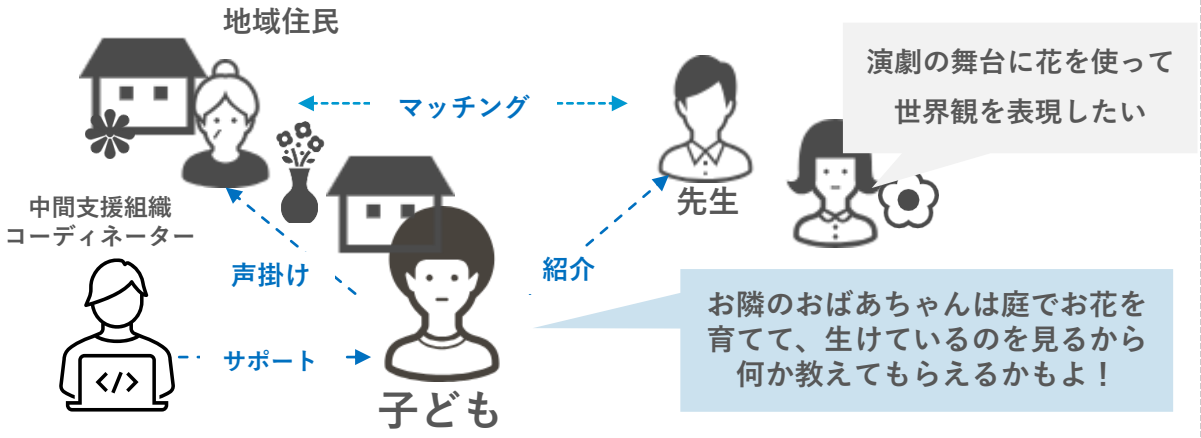
立ち上げ時に想定される人材要件を整えた状態であり、中間支援組織の活動を通じて地域にフィットする人材要件に磨いていく

4 －② 実証成果 詳細 ＜実証②コーディネーターに求める人材要件の検証・整理＞

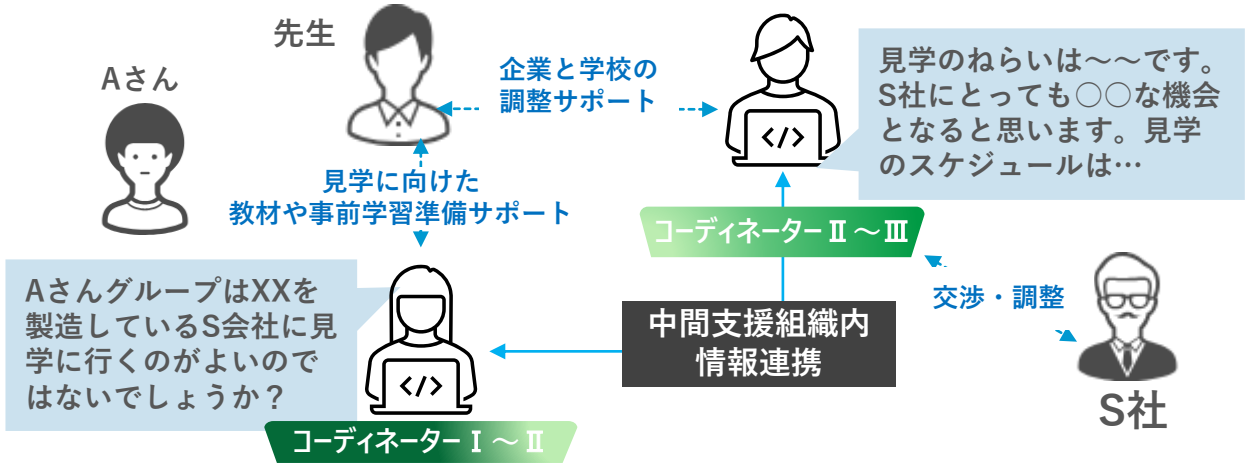
コーディネーターのロールの明確化は、縦割りや切り分けを意図するものではなく、多様な人材が学びの機会に関与しやすくなるための低コスト化の工夫の１つ。各ロールはシームレスにつながっていて、業務上のニーズにおいて不足する部分を補い合うことで地域で持続可能なモデルの成熟を目指す

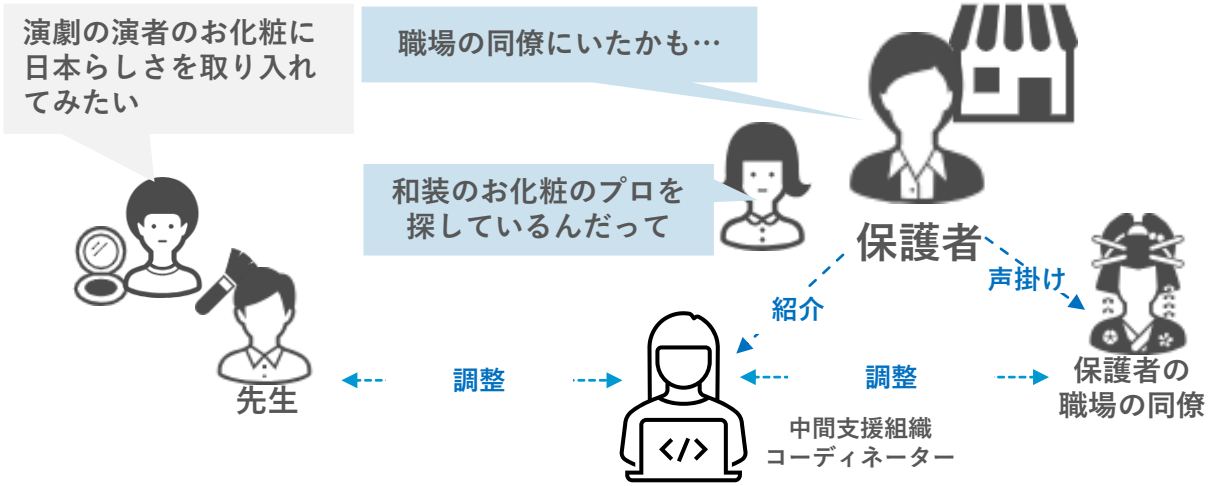
コーディネーターの活躍ケース

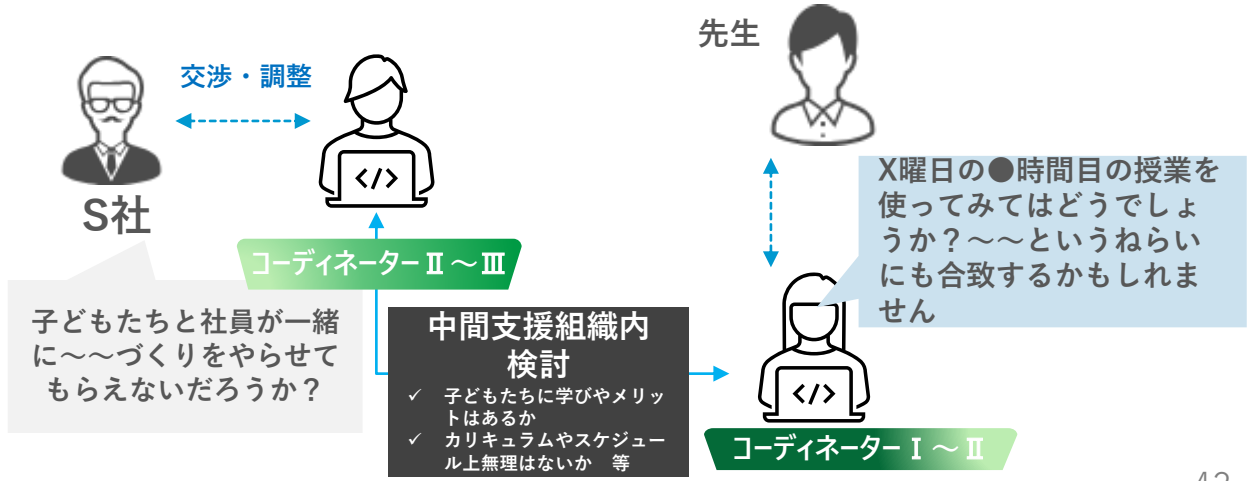
コーディネーターは誰もが担える



コーディネーターは補い合う

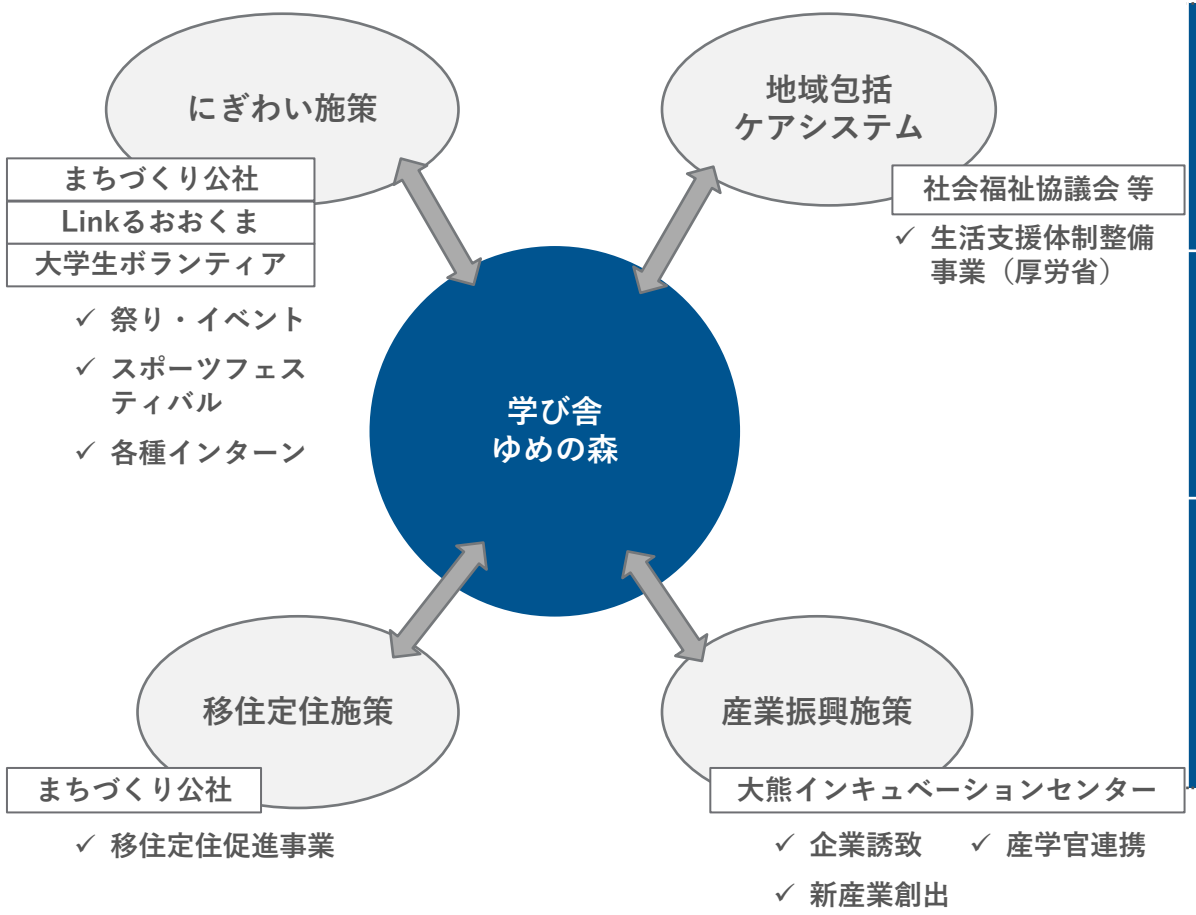






学び舎ゆめの森が持っている町内ステークホルダーとのつながりから、中間支援組織をハブとしたまちづくりの各施策との協働可能性を検討した。双方にとってメリットを生む建付けとすることで、既存の事業や取り組みの一環として、中間支援組織が提供する活動に協力いただきやすくなる感触を得た

大熊町まちづくり施策との協働可能性



	にぎわい施策	移住・定住施策	地域包括ケアシステム	産業振興施策
各取り組みのねらい	• 町に来て滞在する人の増加	• 町内に移住し居住する人の増加	• 高齢者の社会参加を通じた介護予防	• 挑戦する企業や研究機関の活動拠点に選ばれること
現状のゆめの森とのつながり	• 行事の参加出演 • ボランティアへの町案内時の視察先	• 教育移住希望者への視察対応	• 演劇や芋煮会などの行事で地域の人を学校に招く	• 町案内時の視察先探究授業時の外部協力
協働の可能性	• 中間支援組織での教育大学の学生インターンの受け入れ • 学生などを巻き込み、中間支援組織が地域の一員として行事ごとの手伝い	• 教育移住希望者への視察対応（公社で継続） • 教育移住者の声の収集とプロモーションへの反映	• 社協や民生委員と協力し、子どもたちの学びのニーズと地域住民の持つ得意や強みのマッチング機会の創出	• 中間支援組織で企業や研究機関の目的に応じた視察対応や協業メニューの設計、提示 • 町内企業や人脈とのネットワーキング

中間支援組織の人材確保のため、公的制度の活用を積極的に検討した。期待する役割に適切な公的制度を選び、自治体に必要性を実感いただだく訴求ポイントを整理。制度活用に関連する部署との協議を行い、教育まちづくりに貢献することを応援いただき、中間支援組織の活動に復興支援員1名の協力が決定した

大熊町における中間支援組織人材確保のための取り組み（公的制度の利用）

STEP1

期待する役割と利用可能な制度を照らし合わせる

当中間支援組織の場合

今回求める人物の役割として

- ✓ 視察事業、魅力発信事業等の担い手となる
- ✓ 地域にコミットして魅力を伝えられる
- ✓ 町内外のステークホルダーと円滑なコミュニケーションができる

- 地域おこし協力隊（復興支援員）　選択
- 地域活性化起業人
- 企業版ふるさと納税（人材派遣型）
- 地域プロジェクトマネージャー　など

STEP2

自治体への訴求ポイントを整理

当中間支援組織の場合

- ✓ 学び舎ゆめの森を核とした魅力的な教育環境に民間や地域の人の力が加わることで、ごちゃまぜな協働が生まれ、地域で子どもを支え、育つまちづくりに貢献したい
- ✓ 先生は人事異動を避けられないため、ゆめの森が培った教育的価値を発揮し続ける地域側の仕組みとして中間支援組織を立ち上げ、持続可能な体制を構築したい

STEP3

関連部署・組織と協議

大熊町の場合

教育部門
教育総務課、生涯学習課

人材活用制度所管部門
復興支援員制度所管部門として
生活支援課

人材とりまとめ組織
復興支援員のとりまとめ組織の
おおくままちづくり公社

企業の視察事業の対応や魅力発信事業を主な業務内容とし、**復興支援員が中間支援組織の活動に協力してもらえることが決定**

実証成果③　地域企業のリソースを活用した教育プログラムのトライアル実施、効果検証

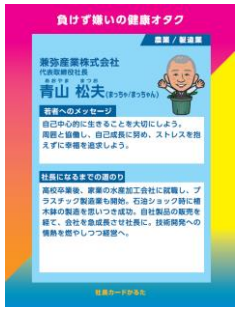
4 －③　実証成果　詳細　＜実証③地域企業のリソースを活用した教育プログラムのトライアル実施、効果検証＞

多様な学びを低コストかつ効果的に実現するプログラムを継続的に実施するには、教育に対して熱量を持つ方々と連携していくことが重要。あわせて、地域内外の人材から魅力的な存在と認識され、選ばれる学校であり続ける必要がある

◆プログラムに参加いただいた社長（経営者）の思い

1．人材の育成や教育に関わりたい
2．業界（企業）イメージを向上したい
3．業界（企業）を支える人材を確保したい
4．事業を継続したい
5．新たな出会いを求めている
6．ゆめの森の教育環境や取組が面白そう

社長チップスエンタテイメントは、上記の思いの強い企業の集合体であり連携することで全国の人的リソースと繋がることが可能



◆教育に対する情熱

- ✓ 社会を担う人材の育成
- ✓ キャリア教育（生き方教育）
- ✓ アントレプレナーシップ教育
- ✓ 多様化する子どもたち（ニューロダイバーシティ）
- ✓ ワークライフバリュー

◆社長（経営者）の行動原理

- ✓ 学校現場への興味・知りたいと思っている
- ✓ 子どもの生の声を聴きたい
- ✓ 学生に仕事やキャリアの関わりイメージを伝えたい
- ✓ 継続的につながりたい（社長カード）
- ✓ 謝金等が目的で行動する社長はいない

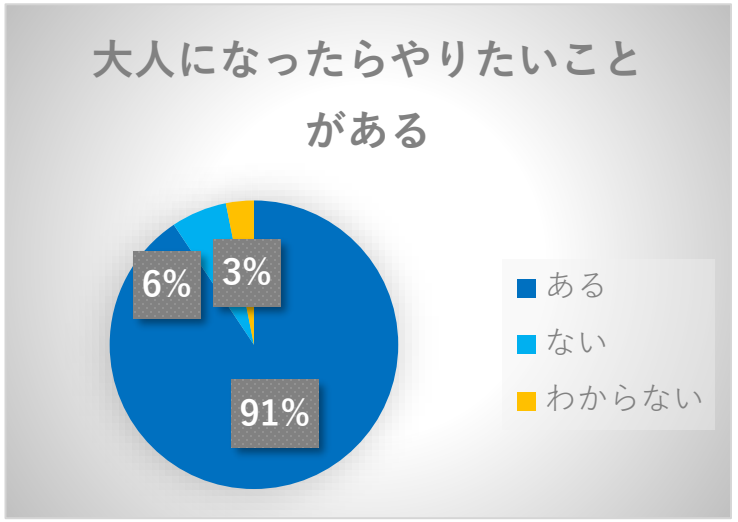
教育に対して熱量を持つ方々と連携する ＋ 魅力的で選ばれる学校であり続ける ▶ 低コストかつ継続的な教育プログラムが実施可能になる ＆ 教育の魅力をキッカケとした企業誘致・進出（産業振興）も期待

3－④　実施内容　詳細＜実証③地域企業のリソースを活用した教育プログラムのトライアル実施、効果検証＞

プログラム実施前に、放課後児童クラブの児童32名にアンケートを実施し、ゆめの森の子ども達の現状を確認。

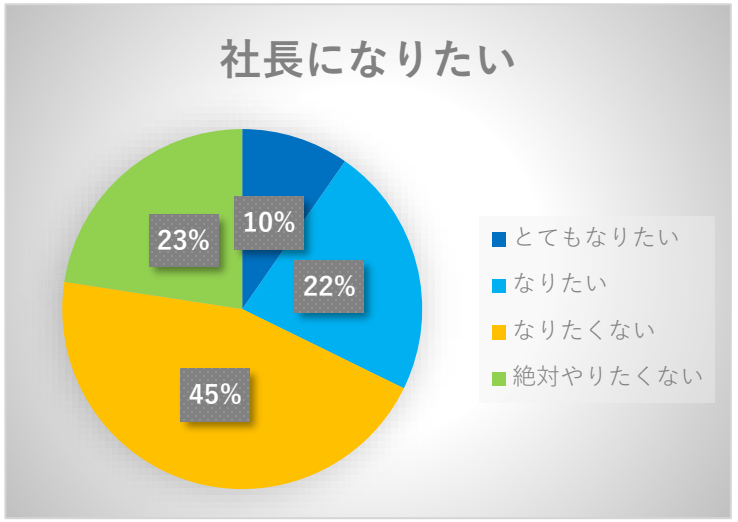
“将来やりたいことがある子ども” が91%であることは、「ごちゃ混ぜラーニングの環境を作り」、「自主的に自らの学びをマネジメント」、「インクルーシブな学びのコミュニティを形成」、「好奇心を発揮し、熱中し没頭していく」と**いう ”ゆめの森のミッション” による教育効果であると考えられる**

■ 将来やりたいことがある



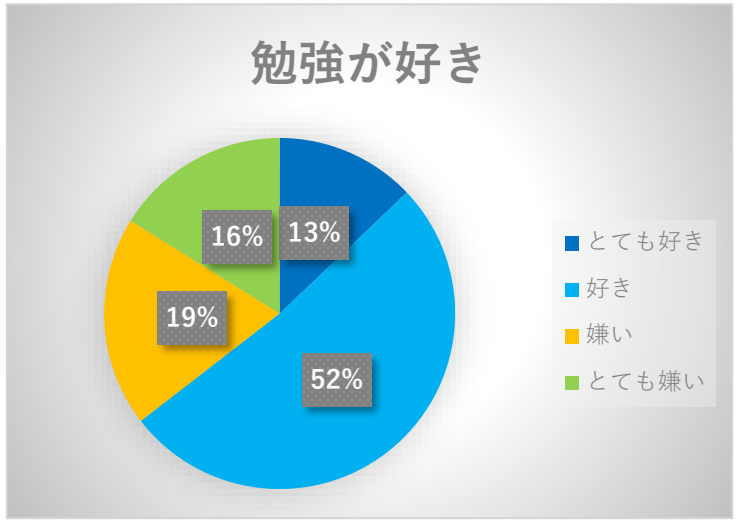
- ゆめの森の教育効果であると考えられる
- 身近な職業やイメージできる職業に限られている
- アルバイトをしたいという回答もあった
- 「ない・わからない」の回答をしたのは高学年の児童

■ 社長になりたいと思うか



- 社長になりたいと考える児童の割合は32%
- 社長という「役職」について肯定的な意見は少数派
- 社長については「エライ人、お金を持っていそう」と認識

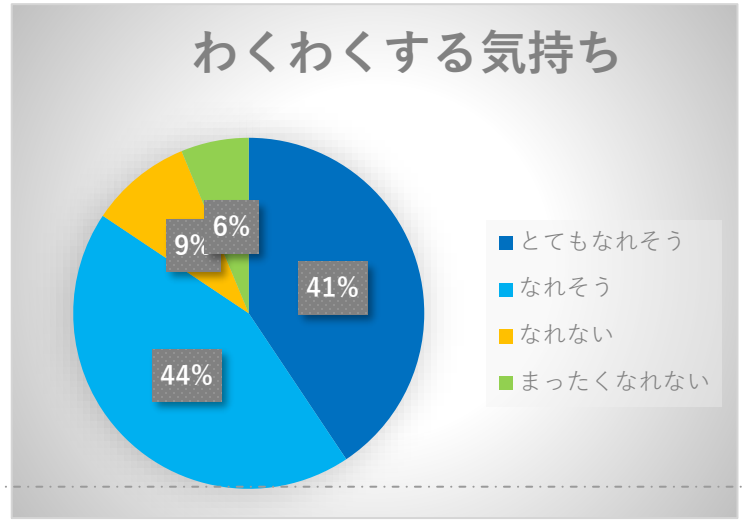
■ 一般的な教科学習について

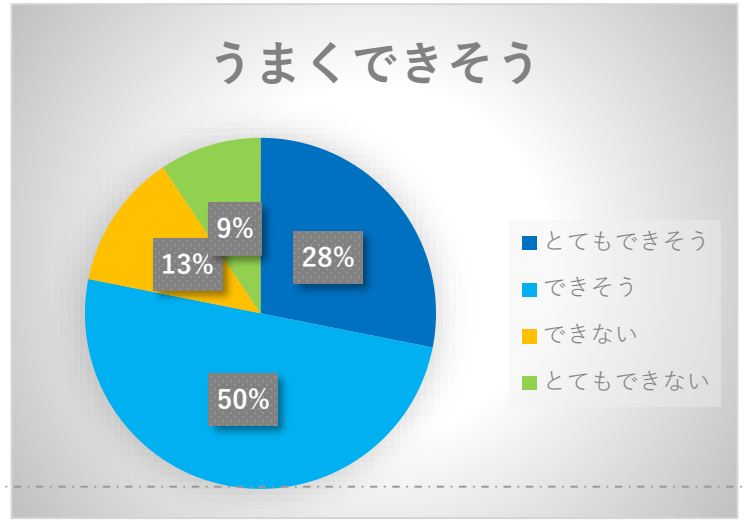


- 勉強について苦手意識がある児童が35%
  - ➢ 科目別では算数38%、国語・体育16%
- 好きな科目：運動/体育40%、創作系16%
- 苦手なことはないと回答した生徒は10%（低学年）

■ 将来仕事をすることに向けての思いの変化

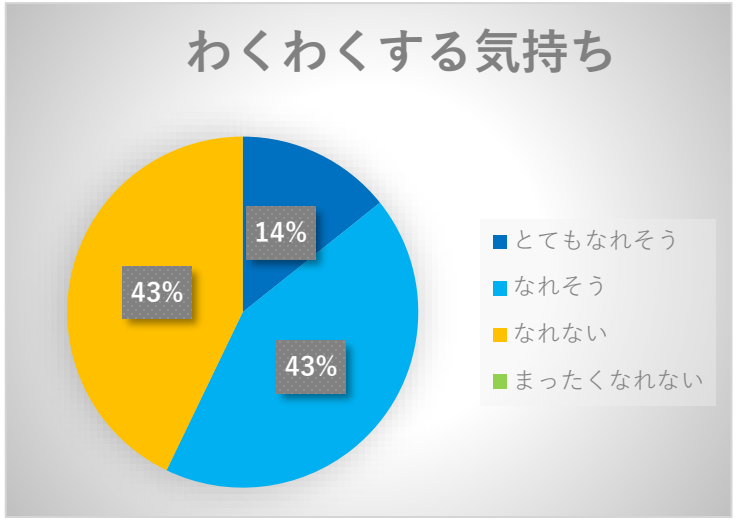
放課後児童クラブの児童（32名）の事前アンケート結果

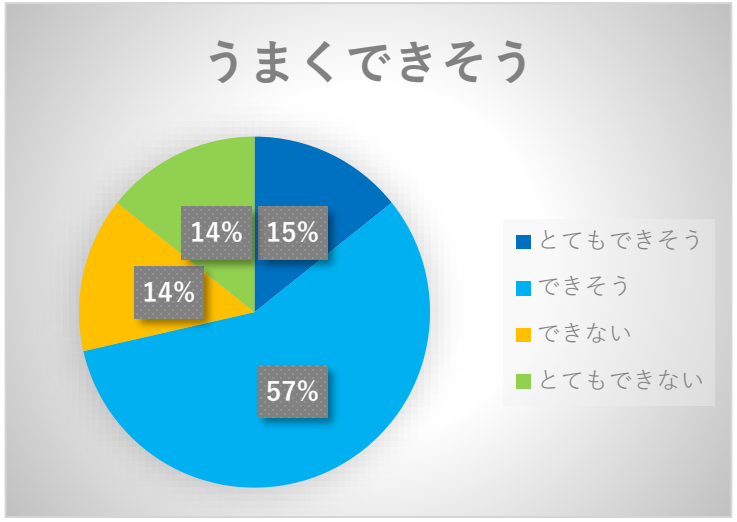




- 約80％の児童は仕事について前向きにとらえている
- 学校活動の中において自信を持っている児童が多いと推測される。
- 少数派ではあるが仕事についてネガティブな思いを抱いている子どももいるため、学校と地域社会を繋げる取り組みが今後も重要となってくる

プログラムに参加した児童（8名）の事後アンケート結果





- プログラムに参加した8名に限ると「将来の仕事に対するわくわくする気持ち」がプログラム実施後に下降
- 社長の話から、現実的な仕事の大変さや苦労を知ったことが影響している可能性あり
- これまでの学校活動では、自分のやりたいことにチャレンジしていたが、やりたくないことも引き受けなければならない責任があることを知ったことも影響があると思慮
- 今後もプログラムの実施を継続し、子ども達の学びのキッカケづくりにつながるか検証をしていく

■ 教育プログラムトライアル後の課題

① 放課後の時間を活用したが、子どもたちそれぞれの時間の使い方を優先する必要があり、時間的な制約があった
② 児童それぞれの発達に応じた準備・進行などの視点が必要であった
③ 放課後は自由に遊びたい子どもが大半なため、児童のプログラムへの興味関心を高める事前準備が不可欠

柔軟さとユニバーサルデザインを意識した学びを提供する必要性

- 多様な子どもたちがみな自分の意思で参加できるアクセシビリティを確保する必要がある
- 子どもたちのやる気・意思を尊重した自主的な活動を支援
- 子どもの興味関心は移りやすいため「やりたい！」となった時に即対応することが重要
- 社長カード・かるたなど、興味を惹くツールの活用
  - ➢ 持ち帰り家庭内の会話へと発展
  - ➢ 保護者から参加してみたいとの意見があった

今後のプログラムの在り方について

- 来校した社長とつながりを継続し、イベントとして終わらせない工夫が必要
  - ➢ 社長からのミッションを遂行・報告することでリレーションを確保し続ける、など
- 長期休みを活用し、子どもが中心となって地元社長図鑑を作成するなどの取り組みを検討
  - ➢ インタビュー・写真撮影・イラストなどで社長カードを子どもたち自身で作成する機会を設定
- 子どもが自らの考えを実行するにあたっての相談先を広げる

5. 今後の展望

1.　ゆめの森モデルを全国へ横展開（仲間を増やす）

- 他の地域で「学校と地域をつなぐことによる多様な学びの実践」に取組みたい場合に、**どんな仕組みがあれば横展開が可能か、中間支援組織はどんな協力が出来るか**？

2.　中間支援組織の事業運営について

- 事業を持続可能にするために、**マネタイズやファンドレイズに向けたビジネス開発が必要**
- 柔軟・迅速に組織を運営していくための体制の構築・発展にも取組む

3.　中間支援組織として検討していく事項

- ゆめの森の魅力を維持・発展させるために何ができるか？**ゆめの森の教育方針や環境は武器**であり、これを維持/進化していくためにどのような取組みをしていくべきか？
- 学校を飛び出して、まちの中で出会うヒトやコトから様々な刺激や学びを得ながら、**「町全体を学びの場」として多様な学びを実践していくには、どんな仕組みが必要か？**
- コーディネーターの創意工夫が可能な余白を残しつつ、**コーディネートのスピード・質を担保・向上するためには、どのような業務設計や連携の仕組みが適切か**？
- 分業制コーディネーターの仕組みで懸念される、**コーディネート依頼者の熱量や期待値を、中間支援組織内で劣化させずに共有することの難しさ**に、どう立ち向かうべきか？
- 学びの現場から求められる取組みを継続/深化していくための中間支援組織内の**評価制度**とは？

Appendix

Appendix：実施体制・実証フィールド （実証自治体・実証校） 詳細

実施体制

事業受託者：一般社団法人Dream Forest Supporters
✓ 統括責任者　安部　雅昭（代表理事）

再委託先：デロイト トーマツ ファイナンシャル
アドバイザリー合同会社
（中間支援組織の設立検討を支援）

協力先：一般社団法人　十勝うらほろ樂舎
（学校・民間連携コーディネートに関する研修講師）

協力先：社長チップスエンターテインメント株式会社
（教育に熱量が高い社長との連携プログラムの協力先）

協力先：株式会社Oriai
（大熊町起業体験プログラム実施業務受託事業者）

協力先：株式会社バトン、株式会社ReFruits
（花麹プリン開発・販売の協力先）

協力先：ビジネスゲートウェイ株式会社
（大熊インキュベーションセンター指定管理者）

■大熊インキュベーションセンター
TOYOTAなどの大企業をはじめ、大学研究室、テクノロジー関連のスタートアップ企業などが100社超入居している

実証フィールド

① 福島県双葉郡大熊町

② 大熊町立学び舎ゆめの森（義務教育学校）

- 所在地：福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平2019-1
- “「わたし」を大事にし、あなたを大事にし、みんなで未来を紡ぎだす”がビジョン
- 2022年に義務教育学校としてスタート（町内唯一の義務教育学校）
- 0歳からのシームレスな学び、学びのマネジメント、演劇教育等の特色ある学びを柱に、習熟度に応じた学習や教科横断的なプロジェクト学習に取り組む
- 2021年3月の未来の教室通信で、ゆめの森が取組む一人ひとりのペースにあった自律的な学びを実現するためのAIドリル（Qubena）導入が、好事例として配信された

③ ゆめの森放課後児童クラブ
（一般社団法人Dream Forest Supportersが運営）

- 所在地： 福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平2019-1
（学び舎ゆめの森校舎内）
- 在籍者数：30 名超
- ゆめの森の校舎内に児童クラブを設置しており、学校とのシームレスな関係の中で、誰一人排除しない、子どもを中心に置いたインクルーシブな活動を行っており、子どもたちに安心安全な環境を提供
- 空間が物理的に一体であることを活かし、放課後だけでなく、朝から放課後まで子どもの学校教育活動にも一緒に入る。一人一人の興味関心や個性を伸長するための関わりやプログラム提供を通じて、学び舎ゆめの森の教育方針と一体的に児童クラブを運営している

Appendix：中間支援組織設立討委員会

委員

◆ 座長
- 佐藤 由弘（大熊町教育委員会 教育長）

◆ 委員
- 南郷 市兵（大熊町立学び舎ゆめの森 校長・園長）
- 増子 啓信（大熊町立学び舎ゆめの森 副校長）
- 志賀 仁　（大熊町教育委員会）
- 安部 雅昭（Dream Forest Supporters 代表理事）
- 近江 正隆（一般社団法人十勝うらほろ樂舎）
- 吉田 学　（ビジネスゲートウェイ株式会社 代表取締役社長）
- 小池 英之（デロイトトーマツコンサルティング合同会社 シニアマネジャー）

◆ オブザーバー
- 荻上 健太郎（東京学芸大学教育インキュベーション推進機構 准教授）
- 大熊町教育総務課長、生涯学習課長
- 大熊町立学び舎ゆめの森 教頭、教員
- 一般社団法人おおくままちづくり公社
- 地元企業関係者（Oriai、バトン、ReFruits）

開催日時・議題

■ 第1回
- ➢ 2024年9月24日（火） 15:00 – 16:30
  - 本取組の全体像・背景などの説明
  - 論点①中間支援組織のビジョン・ミッションの考え方
  - 論点②中間支援組織の位置づけ
  - 論点③中間支援組織の機能
  - 論点④地域の皆様とのコミュニケーション

■ 第2回
- ➢ 2024年10月28日（月） 15:00 – 16:30
  - 論点①中間支援組織の位置づけ（継続）
  - 論点②中間支援組織の在り方
  - 論点③中間支援組織の機能（継続）

■ 第3回
- ➢ 2024年11月26日（火） 15:00 – 16:30
  - 論点①法人形態
  - 論点②事業内容
  - 論点③組織形態と人員計画
  - 論点④キッカケプログラムの実行について（社長チップス）

■ 第4回
- ➢ 2025年1月15日（水） 15:00 – 16:30
  - 論点①中間支援組織の具体的な人員計画
  - 論点②事業計画、収支/資金調達計画
  - 論点③ビジョン・ミッション

■ 第5回
- ➢ 2025年2月20日（木） 17:00 – 18:30
  - 論点①中間支援組織の役割やロードマップ
  - 論点②人材要件の検証結果
  - 論点③他地域へ共有すべき学び

一般社団法人　十勝うらほろ樂舎
元代表理事
近江 正隆 氏

自らで立ち上げた「株式会社ノースプロダクション」でコーディネートしながら、関わる者の当事者意識を醸成し、事業を展開した。
また集まったメンバーと持続可能な組織を立ち上げ、コーディネート機能含め事業を委譲するなどをしてきた。

主な展開事例は以下の通り。

ビジネス

① 経済産業省「にっぽんe物産市プロジェクト」の全国30商社の一つとしてエントリーし、**若手農林漁業者の販路開拓・商品開発をコーディネート**。
② また若手生産者の組織化・ＪＡ青年部の活動の充実を支援した。

まちづくり

① 十勝管内約550戸の農林漁業者を組織化し、「NPO法人食の絆を育む会」を立ち上げ、とかち農村ホームステイを実施。ノースプロダクションからNPO組織に事業を委譲した。十勝管内19市町村自治体職員をホームステイ事務局として、コーディネーター的資質を伝授。現在は約100名の自治体職員と「十勝の未来を考える自治体職員の会」を設立。会で唯一の民間人として、組織間をコーディネート。

② **まちづくり財源を自ら稼ぐ**を合言葉とした組織「一般社団法人十勝うらほろ樂舎」を立ち上げ、企業との連携協働したまちづくりを模索。また**企業幹部対象の人材育成プログラムや、アスリートと連携したスポーツ事業をコーディネートした。**

教育

① 地域学校協働のまちづくり「うらほろスタイル」の立ち上げをコーディネート。「うらほろスタイル」のビジョン（子どもの想いを実現する社会をつくる）を作り、**教員と保護者・地域住民の協働の機運を醸成**した。さらに北海道教育大学との連携により、**「教員養成課程＋地域おこし協力隊」の地域学校連携コーディネーターを育成する仕組み**を作った。

② 文科省からの委託を受け、地域学校協働のエントリーモデルとなるワークショップを開発した。合わせて、ワークショップを活用して、**地域学校協働を調整するコーディネーターの育成に尽力**した。（このワークショップは、現在も文科省HPからダウンロードできる地域学校協働のバイブル的な存在になっている。このワークショップのファシリテート及び講演で年数回現在も全国各地を訪問している）

Appendix：コーディネーター研修①　詳細

10月11日、12日に実施した豊富なコーディネート実績を有する近江委員による第1回コーディネーター研修では、学校と民間をつなぎ、学校を支えていくコーディネーターとしてのマインドセットについて学習しました

マインドセット

- **好奇心、持続性、楽観性、柔軟性、冒険心**という５要件が必要
- 基盤となる自分の軸（何のためにコーディネーターをやるのか？）も必要
- 失敗とは何か？そもそも答えはあるのか？新たな取組を皆が応援する環境でこそチャレンジが生まれる
- 「常に子どもを真ん中に置いて考える」ことに立ち戻ると、ステークホルダーの間で方向性を揃えることができる。コーディネーターは常に中間支援組織内部にいなくとも、必要な時に頼ることが出来ればよい
- 子どもがやりたい事を起点に、大人が動いていく、という姿を見せ続けることが大事
- 教育とは異なる仕事をやっているからこそ学校に提供できる価値がある。現場に入り込みすぎないが、拾えるものは拾っていく、くらいのスタンスでもよい

コーディネーターに求められる役割

- 地域と学校をつなぐハブとしての役割
- 探究学習に向けた先生の内発的動機を高める役割
- 校長と現場の先生との間のギャップを埋める役割
- 教育専門用語を理解しつつ、学校のことを地域・民間の方々が分かる言葉で伝える役割
- 教育実習の受入れタスクなど、先生のタスクを一部担う役割（学習指導要領の理解が必要）
- 人事異動に左右されない、ゆめの森の建学の精神を守る役割

課題

- コーディネーターと先生が腹を割って話せるような環境づくりが重要
- コーディネーターが複数人になる組織を、どのようにマネジメントしていくか
- 子どもは地域内に家族以外に頼れる人が出来ると地域への愛着が強くなる。その機会づくりが大事

本間 悠資 氏

十勝うらほろ樂舎コーディネーターとして**浦幌町の4つの小中学校で活動**
北海道教育大学釧路校在学中に、隣町である浦幌町の取り組み「うらほろスタイル」と出会う。教育関係職ではない大人たちが、子どもに真剣に向き合う姿に感銘を受け、学生時代から「子どもの想い実現ワークショップ」などに通い詰める。
大学卒業後、児童福祉職、企画会社勤務等を経て、平成30年１月より、うらほろスタイルのコーディネーターを務める。

うらほろスタイル

平成19年に町内唯一の高校が廃校となることが決定し、後期高等教育から町外流出が免れない中、地域に大人たちが地域存続の危機感を持った。町外に出ることになっても、この町で生まれ育ったことに誇りをもっていってほしいという市民活動から「**こどもの声を聴き、こども真ん中のまちづくり**」が始まった。

小中9年間の一貫したふるさと学習「うらほろスタイル」や、中高生の放課後自主活動「浦幌部」など、地域の大人とこどもの日頃の関わり合いの土壌の上に、「一人でも多くのこども（次世代）の願いをかなえたい」と思い、 大人がワイワイ寄り合い、実現に向けて知恵を絞った取り組みを行っていることが特徴。

継続的な取り組みの結果、地元への愛着や社会への当事者意識を持った若者（およびミドル層）が既に多数育っている。

本間さんは、先輩コーディネーターである近江さんを、見て、まねて、学ぶことにした

1年目：近江さんが経営数会社の秘書。家族よりもともに時間を過ごし、近江さんの判断や思考を完全に取り込もうとした。
2年目：自分で主体的に行動。判断をするときに、逐次近江さんに伺いを立てて行動、原則報告。
3年目：自立。報告は半分程度、迷ったときに近江さんに相談した
4年目：独り立ち。近江さんに報告や相談をすることはほぼなくなった

4年の歳月を経て、1人前のコーディネーターとして動くようになった

近江さんは複数会社経営しており、出張に行ったらトリプルブッキングを持って帰ってきて、その調整役をしたことも。
相手に不快な思いをさせることなく、丁寧にコミュニケーションをとった
素直に、まずは動けることが重要だった

Appendix：コーディネーター研修②　詳細

中間支援組織のコーディネーターに必要なマインドセット・スキルを導くため、
2/6(木)に第2回コーディネーター研修として、現役ベテランコーディネーターの本間さんに講義いただきました

コーディネーターはすべてのステークホルダーに喜んでいただける振る舞いをするもの

対象が小中学生であっても、大学生であっても、地域の皆さんにご協力をいただいてつくる学びの環境では、**すべての人に関わってよかったと思ってもらえるように企画を組む**。その中でも**主体である子どもたちが学べる環境、思いを叶える環境を作ることの両立**が大切。

中学校の２～３年生の学習では、子どもたちの考えるテーマに応じたゲストを迎えて学びを深める企画で、6回に延べ40人の協力者に学校に来てもらうことがあった。子どもたちの考えるテーマに寄り添っていただける人をチョイスするため、**子どもたちの状況も先生たちと同じくらい知らなければいけない**し、地域の方に満足いただけるように、**すべての方に自分たちが調整しにいく**。そういう人たちが嬉しくなるような仕掛けができたほうがいいと思う。

コーディネーターは全員をよく見て、相手に応じて自分を変化させるもの

学校の求めに応じてポジションを変えている。中学校の場合では、企画だけではなく先生と同じように教壇に立つこともある。他方で小学生はカメラマンだと思われている。**例年はどうか、社会通念上どうかということではなく、公教育に関わりながら、民間人である立場をうまく利用して、時には嫌われ役になることも含めて必要な判断や行動する**ようにしている。
自分が主体者であると勘違いしない。**信頼を得ていくためには、相手のために時間を使う。人に迷惑が掛からないことや自分の強みを活かした関係構築を大事にしている。**

先輩コーディネーター近江さん　うらほろスタイルの実践の積み上げ

ベテランスーパーコーディネーター本間さん

観察力	企画力
想像力	行動力
コミュニケーション力	素直さ
メタ認知力	時間的コミットメント

などなど

コーディネーターの共通マインド・スキル

- ✓ すべてのステークホルダーに喜んでいただける振る舞いに努めること
- ✓ コーディネーター自身が持っている特徴や強みを活かして、各ステークホルダーと信頼関係が築けること

> 実践の中で、左記のような必要なスキルを培う

中間支援組織のコーディネーターの在り方

中間支援組織のコーディネーターが関わるステークホルダーは地域にとどまらず、相手方の影響力の大きさや活動範囲、関わり方がさまざま。
1人のコーディネーターがハブとなって調整し切るのは、先生や子どもたちに提供できる選択肢の物理的な限界につながるのではないか。

> 1人ずつの持てる力が小さくとも、チームで動くことで得意領域を活かして、多様な学びの実践を支えていく